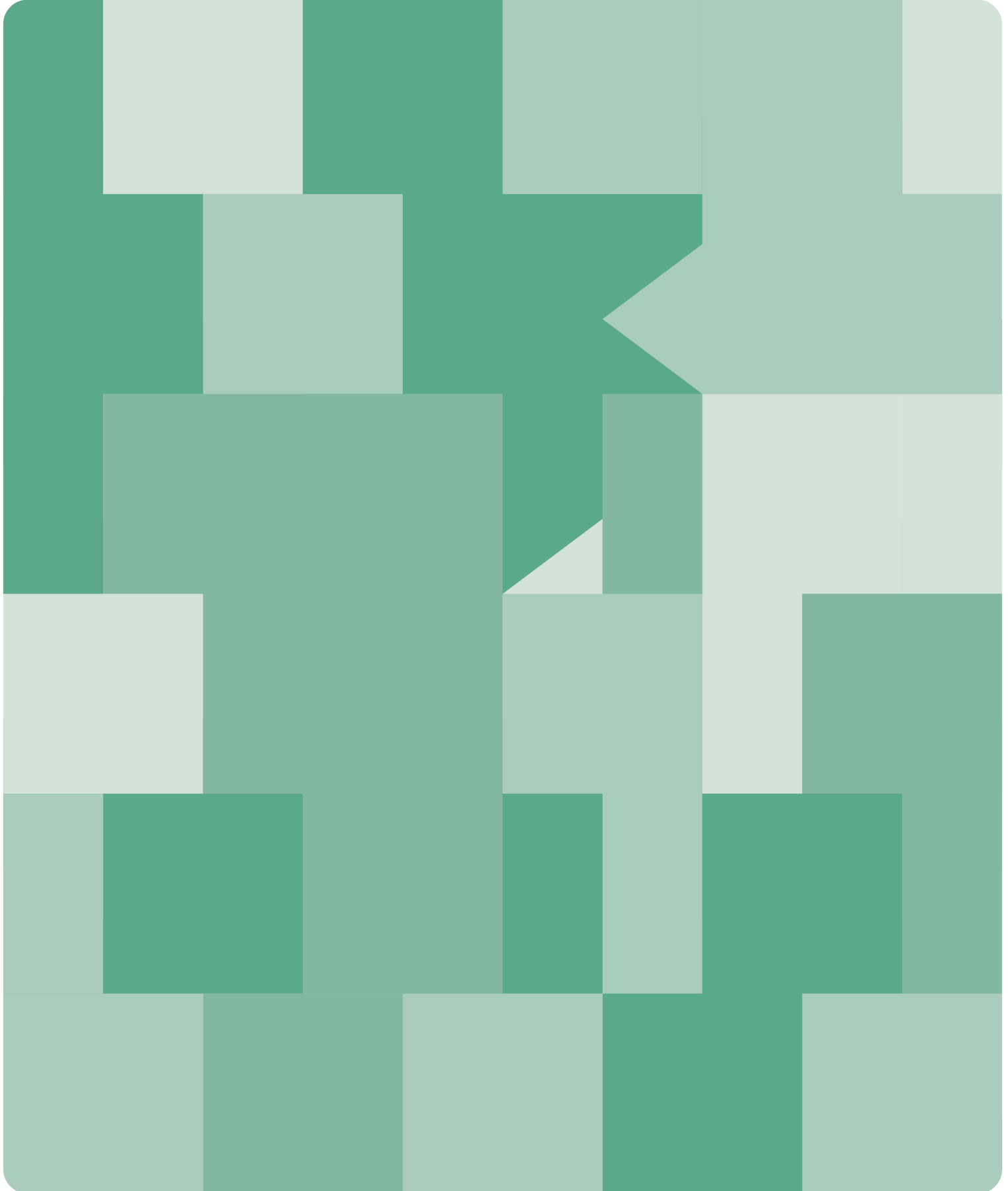




# MA 2025

名城大学建築学科・大学院建築学専攻 優秀論文集  
Department of Architecture Meijo University YEARBOOK 2025



## はじめに

本書は、名城大学建築学科・大学院建築学専攻の学生の研究・学習成果をまとめたものです。

冒頭で、本学科 OBOG へのインタビューを掲載し、その後、修士論文と卒業論文による論文編と、卒業設計と学部設計課題による作品編により精成されています。

修士論文は、建築の専門家として研究成果を社会に発信するものになります。卒業論文は、4年間をかけて学んだ建築の専門知識の集大成です。長い時間をかけて仮説の立案と検証を繰り返すことで、建築学に新たな知見を与える研究を書き上げます。その過程は、社会で広く活躍していくために必要な思考方法の鍛錬の時間でもあります。

卒業設計は、学部4年間の学習の成果になります。現代社会の課題や魅力に対して、自らの提案で社会に新たな可能性を提示するものです。設計を通して自身の空間デザインの原点を探求することを求めています。

学部課題は、未来に向けた柔軟な発想を育むとともに、建築の設計スキルを磨くものです。学生の努力の結晶である本書を通して、多くの方々に本学科・専攻の活動を見ていただき、叱咤激励やご感想をいただければ幸いです。

名城大学建築学科作品集担当 佐藤布武

## Intro Articles

- 004 海外で挑戦する建築家  
話し手：山本 将太 / インタビュー：学生編集委員 / 執筆：佐藤布武
- 006 構造の思考から建築の未来を支える  
話し手：増田 顕 / インタビュー：学生編集委員 / 執筆：佐藤布武

## Selected Articles

### 構造系

- 009 小杉 航（武藤研究室）
- 010 竜沢 伊吹（松田研究室）
- 011 八代 椋介（松田研究室）
- 012 小川 愛莉 / 瀧野 日菜（高橋研究室）
- 013 井上 かほ（大塚研究室）
- 014 大竹 智也（張研究室）

### 設計・計画系

- 016 都築 萌（生田研究室）
- 017 田中 めい（谷田研究室）
- 018 森本 莉央（佐藤研究室）
- 019 柳澤 千尋（萩原研究室）

### 環境・設備系

- 021 空野 佑真（吉永研究室）

### 歴史系

- 023 棚橋 瞭（三浦研究室）
- 024 茂谷 唯（米澤研究室）

### 材料・生産系

## Diploma Projects

- 060 日常を歪ませる影  
寺西 知慧
- 061 22年の人生史  
村林 愛斗
- 062 あゆみ、あゆまれる散歩道  
西脇 嵩人

## Selected Works

### 3年生課題

- 047 石塚颯真・岩村望生・岩村蘭丸■伊藤諒哉・市川紗弥・岡村咲奈  
安達晴捺・大山羽衣・小泉史昇■松本尚子・矢内日南乃・分部みゆ
- 050 青木椋太郎■長谷川代羽■本田陸■見越星哉
- 053 青木椋太郎■坂井奈月■那須田知樹■横山葵
- 056 安達晴捺・服部天音・藤山ゆき■岩村望生・坂井奈月  
小泉史昇・那須田知樹・本田陸■倉橋輝成・長谷川代羽・松井優大

### 2年生課題

- 031 伊藤紗良■大矢颯乃■佐藤椋香■萩原悠奈■平本宙■山田歩実
- 035 岩堀衣真■鬼頭七菜■高山莉奈■豊田妃菜■平本宙■水野愛芽梨
- 039 河村花海■高山莉奈■長嶋志音■松本千潤■水野愛芽梨
- 043 阿部花暢■河村花海■佐藤碧巴■長嶋志音■松本千潤■水野愛芽梨

# 海外で挑戦する建築家



「ヴィトラ・キャンパス」でのプロジェクトの様子

社会で活躍するOBOGにこれまでのキャリアや考え方を聞くインタビューシリーズ。今回は、名城大学大学院を修了後、フランスへと渡り、設計事務所就職した山本将太さんに話を伺った。

山本 将太  
建築家  
名城大学  
2013年卒  
(柳沢研究室)  
同年: Atelier  
Tsuyoshi Tane  
Architects

——卒業後のキャリアについて教えてください。

私は名城大学大学院を修了後、フランス・パリに拠点を置くAtelier Tsuyoshi Tane Architectsに入り、2025年の夏まで約8年間勤務しました。インターンから始まり、プロジェクトアーキテクトを経て、最終的にはプロジェクトマネージャーとしてチームの管理やインターンの採用人事まで、幅広く担当しました。

事務所はスタッフの3分の1が日本人、他はイタリア人など多国籍なメンバーで構成されています。プロジェクトは日本国内のものが多く、若手の頃はコンペにトライしていました。2018年の「帝国ホテル」の最初のコンペや、元海軍基地を美術館に改修する「テルドラマリオン」の内装設計、ギャラリー・間での田根さんの個展の模型搬入などを担当しました。キャリア中盤では、世界中の超有名建築家が作品を展示する「ヴィトラ・キャンパス」でのプロジェクトに携わりました。

そこでは、庭師のピート・アウドルフ

氏や現地の職人たちと共に空間を作り上げる貴重な経験に恵まれました。石職人と建物の基礎を作ったり、茅葺き職人やローブ職人とコラボレーションしたりと、その街の歴史や風土に根ざした建築を形にしていきました。また、東京の住宅プロジェクト「Clay House (新建築住宅特集2023年10月号掲載)」では、工芸に精通したクライアントのためにほぼすべてのディテールをカスタムで設計しました。現在は事務所を退所したのですが、パリに住んでいます。将来的には、日本とフランスの両方で仕事するような事務所として独立を目指しています。その目標に向けて、今後は他事務所ですらに経験を積もうと考えています。

——なぜ海外で働くかと思ったのでしょうか。田根事務所に通っていた経緯も教えてください。

もともと大学院1年を終えた後に、ロンドンへ半年、インドへ半年留学したことが大きな転機でした。インドで最も有名な建築家のバルクリシュナ・ドーシ

# 言葉より先に「旅」に出よう。 海外で培った建築の視点。

(2008年ブリツカー賞受賞)の事務所にてインターンをした際、国際的な働き方の面白さを知りました。その後、ボスが若くて距離が近く、プロジェクトが刺激的な環境を求めて田根さんに辿り着きました。国内外問わず「ボスと近いところで働ける場所」を探していました。

実は、最初に事務所にポートフォリオを送った際は反応がありませんでした。しかし、私はそこで諦められませんでした。ある時、日本で田根さんのレクチャーの機会があり、「これはチャンスだ」とポートフォリオを片手に突撃し直談判しました。そこからインターンが始まり、3ヶ月でスタッフになることができました。待っているだけでなく、自ら動いてチャンスをつかみに行くことが、海外で道を切り拓く鍵になりました。

—海外で暮らし、働いてみて、日本との違いや感じたことはありますか？

まず驚いたのは交渉の文化です。ヨーロッパのスタッフは自分の給料を交渉しますし、条件に納得できなければ働かないというスタンスの人もいます。働き方の仕組み

も合理的で、平日にコンベンなどで深夜まで働いた分は、後日必ず「代休」として与えられます。他事務所では、コンペが終わるとスタッフが一ヶ月くらい休んで姿を見せなくなることも珍しくないようです。

生活面では、パリは物価が非常に高く、肌感覚としては生活コストが1.5倍から2倍の印象です。給料が30万円あっても、家賃が22万円ほどかかるため、決して余裕はありません。しかし、夏には2週間のバカンスがあり、年末年始もしっかり休めます。フランスの仕事は細かい改修が多く、多くは日本の仕事でした。日本のショッパデザイナーや大規模な改修プロジェクトをフランスで担当していました。

—学生時代はどのような経験をされていましたか？名城大学での学びが今にどう活かしていますか。

実は大学には数学と物理の試験だけに入り、英語はほぼ勉強していませんでした。私の英語が一番鍛えられたのは、間違いなくインドの現場です。でも決して

順風満帆ではないですよ。ベジタリアンの街だったので肉が食べられず7キロ痩せ、輸入店まで鶏肉を買いに行つて、肉の味を噛み締めたのも良い思い出です。そんな苦労もありつつ、インド人スタッフたちと実用英語でやり取りする中で、言葉を身につけていきました。ドーシ氏の事務所でのインターンでは、幾何学的なデザインや、折り紙から着想を得たドーム、葉脈のようなストラクチャーのスタディなど、巨匠のデザイン手法に触れられた貴重な時間でした。

話を学生生活に戻しますね。学部時代の卒業制作・論文では、宮城県気仙沼市の復興調査に取り組みました。仮設住宅を一軒ずつ回つてポストイングリシ、住民の意見を吸い上げ、現状を可視化する図版を作りました。大学院での修士論文は、研究室の先生の影響でインドについて書きました。それ以外にも多くのプロジェクトを経験しました。そうした大学での学びを通して「何を問題とし、どんな意義があるのか。手法やロジックは正しいのか」という視点を得ました。この、自分の設計を検証し続ける姿勢は、今の実務でも常に意識しています。インターネットで情報を集めるだけでなく、実際に行つてみて、現地の空気を感じる事が何より大事だと実感した学生時代でした。

—最後に、今の学生に向けてメッセージをお願いします。

ぜひ「旅」に出てほしいなと思います。言葉や資格の心配をする前に、まずはその場所に行つて、空気を吸い、そこで暮らす人や職人さんの手仕事に触れてみてください。学生時代に会った景色や、フィールドワークで感じた違和感、そして旅先での経験は、いつか皆さんが建築を作る時の大きな力になります。

もし海外で働きたいという気持ちがあるなら、まずは一步踏み出してみてください。まずは自分の目で世界を見て、そこで何を感じるかを大切にしてほしいと思います。



インドでのインターンの様子

# 構造の思考から 建築の未来を支える



修士2年で行ったCLTの実験

社会で活躍するOBOGにこれまでのキャリアや考え方を聞くインタビューシリーズ。今回は名城大学で特別研究員として研究を行っている増田顕さんにお話を伺った。

増田 顕  
研究者

名城大学 2019 年卒業  
(松田研究室)  
構造設計事務所に就職。その後、名城大学にて博士課程と特任助手。

― 学生から現在までの道のりを教えてください。

私は 2019 年に名城大学建築学科を卒業し、松田研究室の 1 期生として修士課程へ進みました。現在は特別研究員として、次世代の木質材料である CLT（直交集成板）の研究を続けています。修士課程を修了した後は、一度社会に出て実務の道へ進みました。就職したのは名古屋に拠点を置く、構造設計を専門とする設計事務所です。そこは意匠設計を行わず、構造設計者のみが在籍する事務所でした。一般的な事務所では難しいとされる複雑な計算や大規模な建物の解析を得意としており、スーパーゼネコンや大手組織設計事務所から技術力を頼りにされるような環境でした。

そこで私は主に S 造（鉄骨造）や RC 造（鉄筋コンクリート造）の構造設計を担当し、実務の最前線で建物が形になるプロセスを学びました。日々図面を描き、計算書と向き合う中で、実務としての厳しさとやりがいを感じていました。

しかし、実務を経験すればするほど、「修士時代に取り組んだ CLT の研究を、中途半端に終わらせたくない」という思いが強くなりました。「この新しい材料の設計法を、一つの完成形として社会に実装したい」「他の誰にも真似できない、自分だけの強みを持つプロフェッショナルになりたい」。そう考えた時、再び大学に戻る決意をしました。社会人を続けながら博士号を取る選択肢もありましたが、私は研究に没頭できる環境を選び、博士課程へと進みました。「何者かになりたい」という、学生時代から抱いていた漠然とした想いを、確かな形にするための選択でした。

― 現在取り組んでいることや、「建築構造」という分野の面白さについて教えてください。

現在は、主に CLT を用いた新しい構造システムの開発や、その安全性を検証する研究を行っています。この分野の最大の魅力は、自分の手で動かし、確かめる「実験」にあります。

# 自分の研究がいつか『法律』として残り、被災地の復興や未来の安全を守っていく。

構造系の研究は机上の計算だけではありません。実験系の研究では仮説として、建物の一部を実寸に近いスケールで自ら作り、それを巨大な試験機にかけて「壊す」ところまでを行います。高さ6mにも及ぶ巨大な部材が実験室でメキメキと音を立てて破壊される瞬間の迫力は、言葉では言い表せないものがあります。実験が仮説通りに進むことは稀で、失敗するたびに「なぜか？」と原因を探り予測を立て直す。この粘り強い繰り返しこそが構造実験のやりがいです。

—学生時代の研究室での活動や、思い出に残っているエピソードはありますか？

私は松田研究室の1期生だったので、最初は先輩がおらず、先生と手探りで研究室の土台を作っていくような日々でした。先輩が入ってきてからは、彼らに手伝ってもらいながら、試行錯誤して実験を進めました。特に印象に残っているのは、3年生のゼミで行った「壁1グランプリ」です。これは、ルールに則って自分たちで木造の壁

を作り、その強度を競うコンテスト形式の実習です。この活動を通じて、木造の仕組みや実験の手順を、同期の仲間たちと学んだのを覚えています。

ゼミ以外では、デザイン課題にも全力で取り組んでいました。また、ロードバイクで浜名湖を一周する旅に出るなど、趣味にも全力でした。サークルには入りませんが、自由に外の世界へ飛び出していく時間を大切にしていました。そうした「余白」の時間が、研究のアイデアに繋がることもあったように思います。

—研究と社会とのつながり、そして構造を学んだ先のキャリアの広がりについて教えてください。

研究者の仕事は、論文を書くことではありません。例えば私たちの研究は、災害現場のリアルな課題と直結しています。私は能登半島地震の被害調査にも赴きました。そこで目にしたのは、倒壊した家屋と、無事に残った建物が混在する光景でした。調査を進める中で、新しい

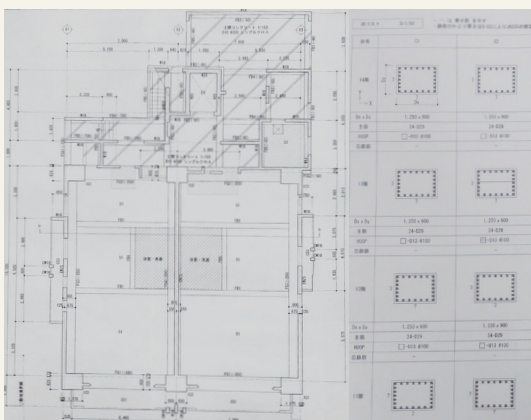
設計法に基づいて建てられた建物や、近年の補強が行われた建物が、激しい揺れに耐えて残っていることを確認しました。「自分たちが積み上げてきた研究や基準は間違っていないかった」、そう確信できた瞬間でした。

しかし同時に課題も見つかります。私たちはそのデータを持ち帰り、解析し、日本建築学会の委員会などで議論を重ねます。そしてその成果は最終的に、建築基準法という国の法律や、新しい設計指針として社会に還元されていきます。被災地での教訓を、次の百年の安全に変えること。自分が関わった研究が法律の一部となり、これから建つすべての建物の安全性を底上げしていくことが構造研究に携わる人間にとっての最大の意義であり、誇りです。

こうした構造の専門知識は、社会のあらゆる場所で求められています。構造系研究室の卒業生の進路は多様ですが、多くの人はゼネコンやハウスメーカーの施工管理へ進みます。現場で図面の矛盾に気づいたり、安全な施工順序を綿密に判断する必要があるったり、現場ではとても重要な存在です。また、私が経験したような構造設計に進む人は意匠設計者の描いたデザインを技術的に実現させるパートナーとして活躍します。それ以外にも、アルミニウムや鉄鋼などの材料メー

カー、鉄道会社の建築部門、家電メーカーの住宅部門など、活躍の場は多岐にわたります。

「将来何になりたいか」がまだ決まっていなくても焦る必要はありません。自身、親戚から壁の設計を頼まれたり、CADオペレーターのアルバイトをしたりといった、目の前にあるチャンスに自ら出会いに行ったことが今の道に繋がりました。建築は、自分の手で触れ、経験を積み重ねることしか見えてこないものが多い学問です。物理が苦手だった同期も、研究室での実験や実務を通じて立派な技術者として活躍しています。粘り強く、正解のない問いに立ち向かえる皆さんの挑戦を、心から楽しみにしています。



実際の構造図面（基礎梁伏図と柱断面リスト）

## 安全性そして合理性と構造美のバランスを目指す

建物が存在する前提として安全性の確保があります。また、構造デザインにおいて合理性と構造美は密接な関係があります。これらバランスの良い建築技術を目指します。

主な専門科目として以下があります。『構造力学』では安全性評価や構造物として成立させる基本として力の流れ・変形・崩壊などを学び、『建築各種構造』や『建築構造デザイン』では鋼構造・RC 構造・木質構造など各種構造形式の基本事項や特徴を踏まえ構造デザインの基本を学びます。

## 構造系の研究手法

構造系の研究は、実験・実測や構造解析で検討し、その結果を理論と結びつけることで進めていきます。実験・実測では、建物を模擬した構造物にゆっくりと力を加えて耐力や壊れ方を把握したり、振動を加えて揺れ方を把握したり、振動観測により建物や周辺地盤の特性を調べたりします。構造解析ではコンピュータを使った数値計算により、様々なシミュレーションをして構造物を評価します。どちらも構造的な物理現象を確認することが目的で、得られた結果を理論と関連付けながら分析し、建築の構造デザインやリノベーションなどへ役立てることになります。検討の対象は構造物となることが多いですが、それ以外に例えば地震時の家具の転倒対策などの安全性評価に関する活動も実施しています。関連して防災全般について構造的な面からアプローチするような研究もあります。

## 構造系の研究テーマ

研究テーマについては、構造物の力学的特性の分析・把握に重点を置いた基礎研究、合理的な構造システムを提案する開発研究、様々なシステムを建物の構造デザインへと活かす方法を模索する応用研究など、色々な形態があります。

学生は興味がある分野について教員と相談しながら研究テーマを決定します。

(文責 / 構造系教員 松田和浩)



# 薄板の折板部材を用いた空間構造への適用に関する基礎的検討

小杉 航 (武藤研究室)

本研究は、薄板コルゲート部材を用いた連続アーチによる空間構造を対象に、未実施であるプッシュオーバー解析による耐力の推定及び非線形地震応答評価をFEMによる数値解析を用いて行い、各種外力事象に対する損傷及び耐力余裕度の評価を試みることで、国内における合理的な構造設計手法の確立を目的としたものである。2つの曲率を持つアーチ部材とアーチ部材を約20mに展開した連続アーチをモデル化し、自重・積雪荷重・風圧・地震荷重の4種類の荷重について検討を行い、それぞれの荷重条件において薄肉シェル特有の座屈挙動や動的特性を定量的に把握した。本研究にて検討したアーチ形状は、どの荷重条件においても安定した挙動を示し、これにより、ルート3及び大臣認定を獲得する一連の道筋を作ることができた。

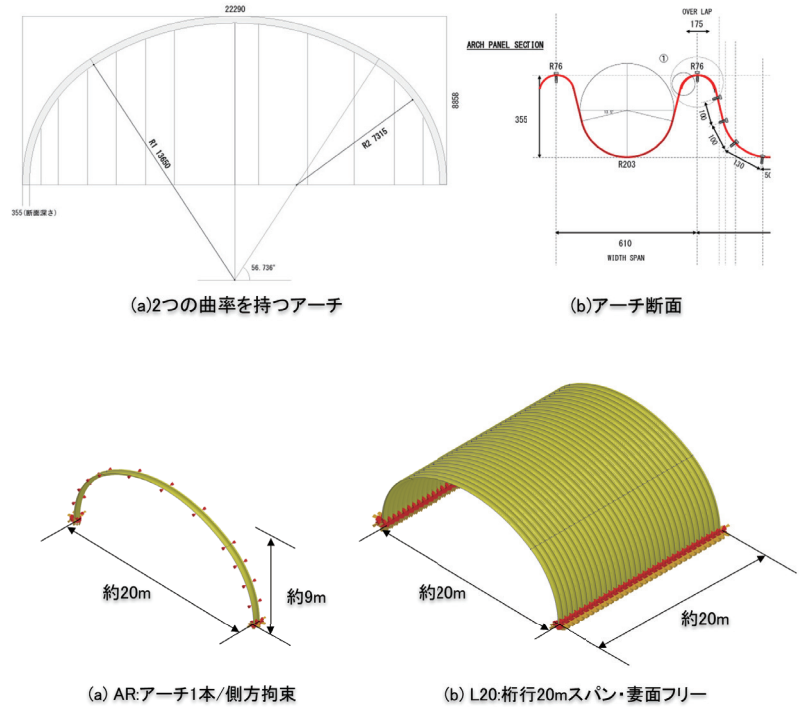


図3 解析モデル



図1 コルゲート部材の格納庫への適用例

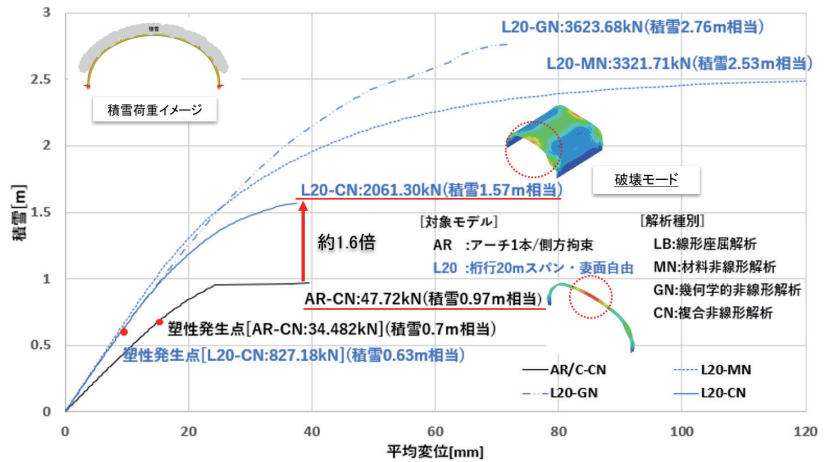


図4 積雪 - 平均変位関係

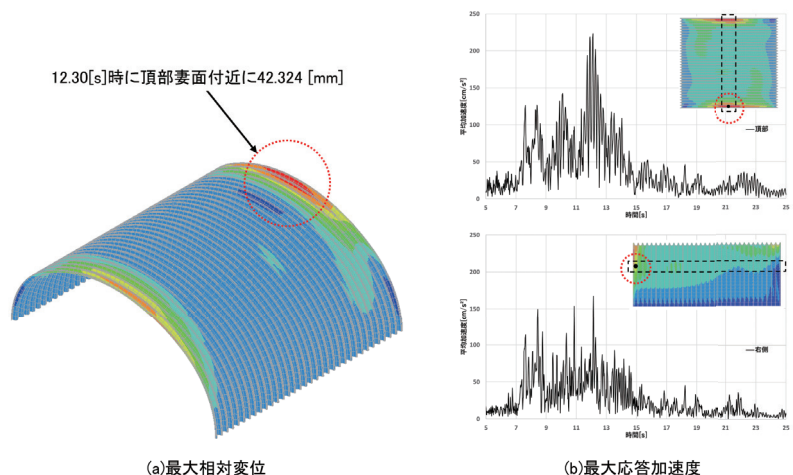


図5 地震応答評価



# 制振ブレースを挿入した中高層木質ラーメン構造の力学的挙動

竜沢 伊吹（松田研究室）



梗概はこちら

木造建築の課題としてS造やRC造に比べて地震などのエネルギー吸収能力が低いことがあげられる。本研究ではエネルギー吸収性能があり、繰り返しの地震にも劣化しない制振技術を用いることで高層木造建築の高耐震化を目指している。

対象とする鋼板挿入ドリフトピン式モーメント抵抗接合（DP接合）は木質構造接合部設計マニュアルにまとめられており、本研究ではそこに制振ダンパーを組み合わせた柱梁接合部を提案し、実験（図1）によりその力学的挙動を把握した。一般的な接合部仕様に加え、図2に示すダンパー軸力負担ドリフトピンやサイドスチフナを追加したので、パラメータを設けそれらの影響についても確認した。

図3に示す荷重変形関係から、ダンパーを入れたことで接合部のガタが減り、かつ靱性向上したことが確認できた。パラメータによって、集成材の割裂破壊（図4）の起こり方や鋼板の面外変形などに違いが見られ、その原因についても整理した。



図1 接合部実験の様子

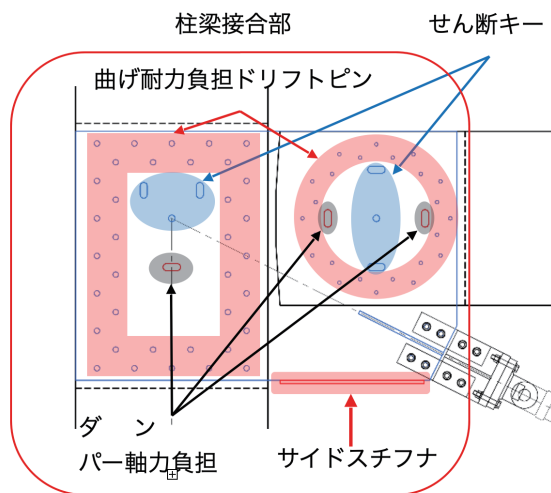


図2 接合部の各部名称

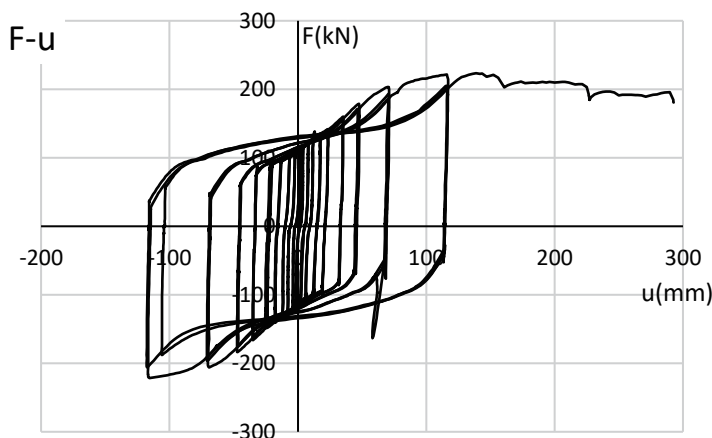


図3 荷重-変形関係

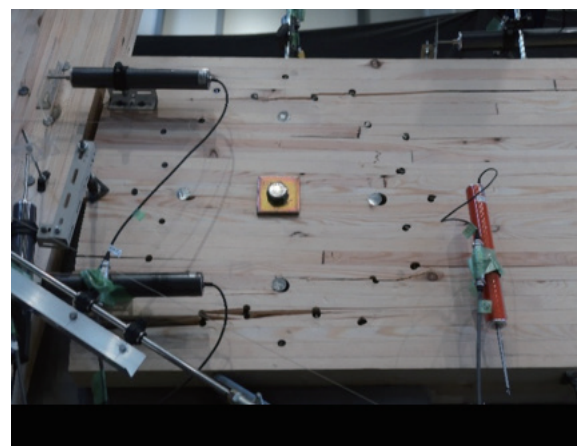


図4 集成材の割裂破壊

# 真壁パネル制振壁を対象とした力学モデルの精度改善

八代 椋介 (松田研究室)



梗概はこちら

本研究は、真壁パネル制振壁(図1)を対象に、釘と制振材を詳細にモデル化することで力学モデルの精度改善を図ったものである。真壁パネル制振壁に対して、釘配列の寄与を面材4辺の各中心に縮約し、これらを剛体でつなぐ手法である4点縮約法を適用した。

さらに、面材釘と枠材釘を直列結合、面材釘と制振材を並列結合とした抵抗力に、面材の圧縮筋かい効果を並列に考慮した力学モデルを構築した。昨年度実施された実験結果を用い、釘には図2のような履歴則、制振材には降伏せん断ひずみやせん断弾性係数等に基づく履歴則(図3)を用いて実験結果を高精度に再現した。得られたパラメータに基づき、制振材2mm厚試験体を含む解析を行った結果、小変形から大変形までの層せん断力-層間変形関係について、昨年度モデルより実験値に近い挙動が確認された(図4)。構築したモデルにより、制振材厚さや釘・制振材の縮約倍率を変更した場合の挙動評価が可能となった。

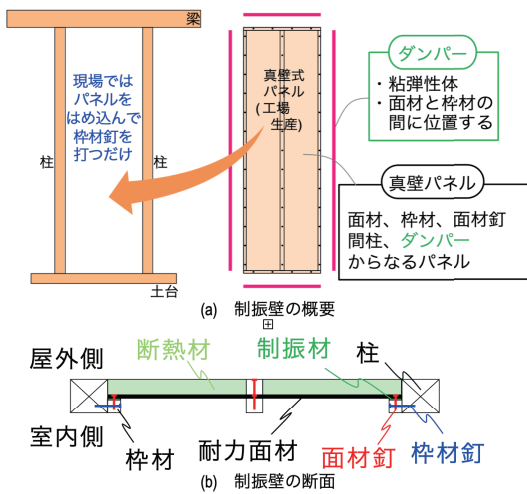
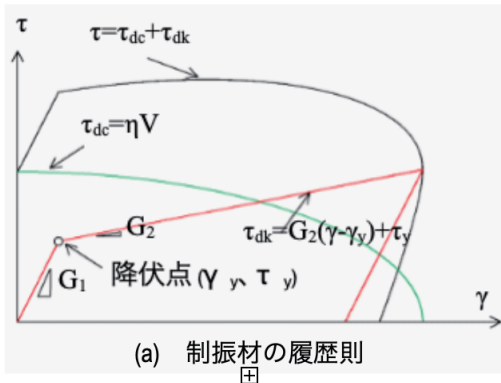
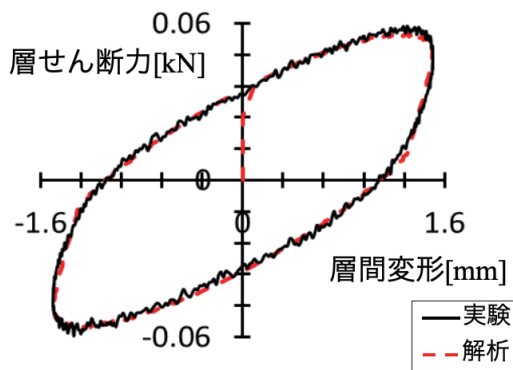


図1 本研究で対象とする制振壁

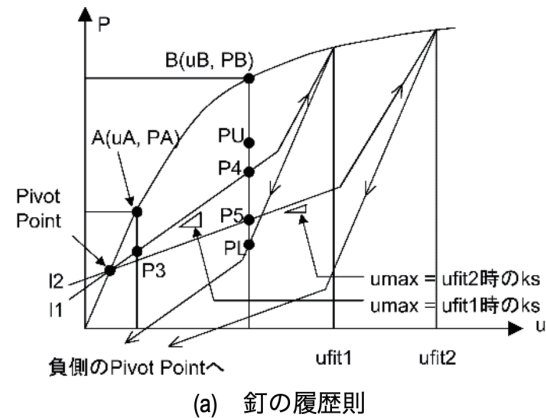


(a) 制振材の履歴則

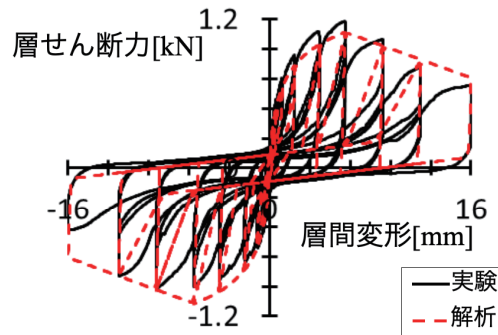


(b) 制振材の挙動を再現したモデル

図3 制振材のモデル化



(a) 釘の履歴則



(b) 釘の挙動を再現したモデル

図2 釘のモデル化

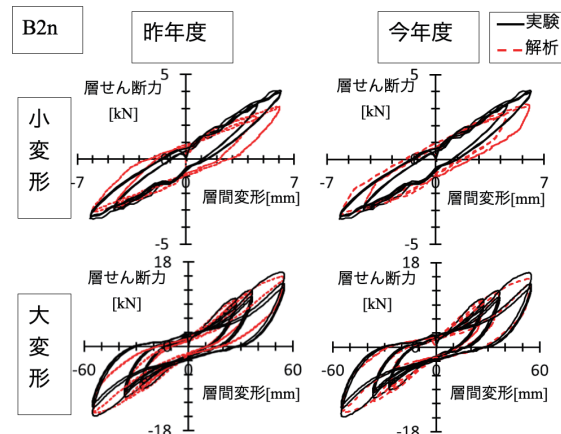


図4 実験値と解析値の比較



# DeepLearning に基づく地震動予測モデルの構築に関する研究

小川 愛莉 瀧野 日菜 (高橋研究室)



梗概はこちら

本研究は、建築物の耐震設計や防災システムの高度化に不可欠な地震動強さの予測精度の向上を目的としている。従来、地震動予測には経験的な予測式 (GMPE) が広く用いられてきたが、複雑な地盤条件や空間的な位置関係に起因する観測記録のばらつきを十分に考慮できないという課題があった。

そこで本研究では、大量の強震観測データを活用し、複雑な非線形関係を学習可能な深層学習 (DNN) を用いた予測モデルを構築した (Fig.1、Fig.2)。検討の結果、従来の GMPE では組み込みが困難であった震源や観測点の位置情報を説明変数に加えることで予測精度が向上すること (Fig.3) を確認した。また、地盤情報では浅部地盤特性の寄与が高く、変数を増やしすぎるとかえって性能が低下する場合があることも示された。

従来の地震動予測式 (GMPE) との比較においても、DNN モデルは高い再現性を示しており (Fig.4)、従来手法を補完する有効な手法であることが確認された。

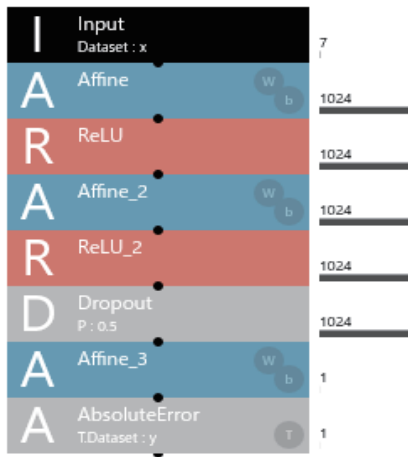


Fig.1

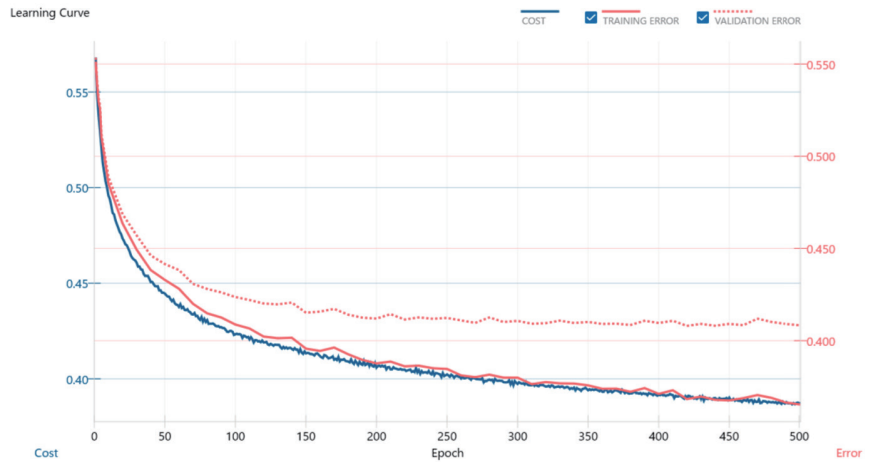


Fig.2

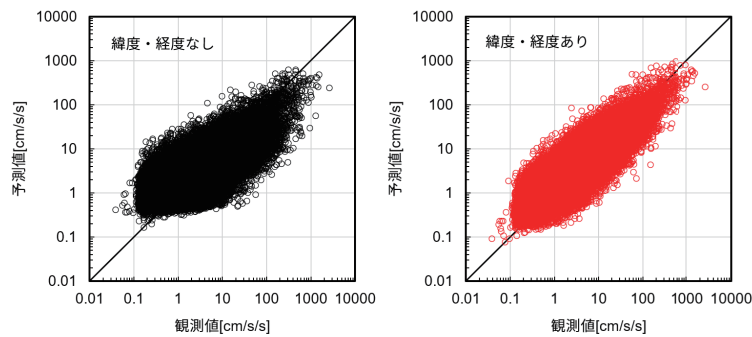


Fig.3

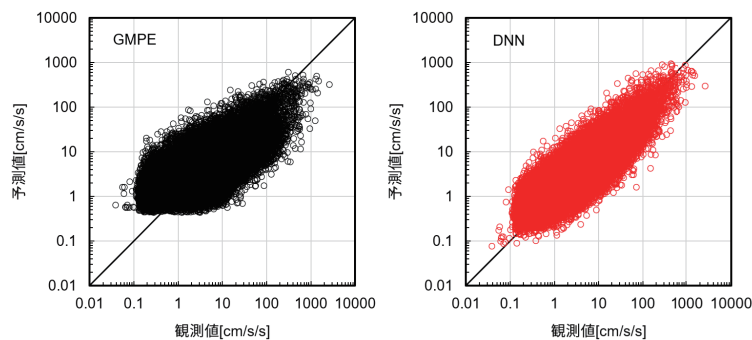


Fig.4

# 断面欠損を有する鋼矢板の弾性座屈荷重と曲げ耐力

井上 かほ (大塚研究室)



河川・水路等の護岸工事などに使用され腐食した鋼矢板は必要な構造耐力を備えているか判断され補強や交換が行われるが、維持管理を高度化し長期間にわたって供用するためには腐食後の鋼矢板の耐力を精度良く把握する必要がある。鋼矢板は腐食量が大きくなると局部座屈により剛性、耐力ともに想定以上に低下することが考えられ、腐食により板厚が部分的に薄くなると、腐食した鋼構造部材の座屈形状や最大耐力は、腐食部の形状や板厚により複雑に変化することが考えられる。

本研究では、腐食の影響を板厚を減少させる断面欠損としてモデル化し、数値解析結果と理論的検討結果を用いて弾性座屈荷重の適切な評価指標の提案と既往の研究で提案された曲げ耐力算出式の修正を行う。また、実際に腐食させた試験片による引張試験結果と実際に腐食させた鋼矢板の座屈実験結果を用いて、断面欠損モデルで提案した曲げ耐力算出方法が実際に腐食させたものに対して適用可能であるかを確認する。

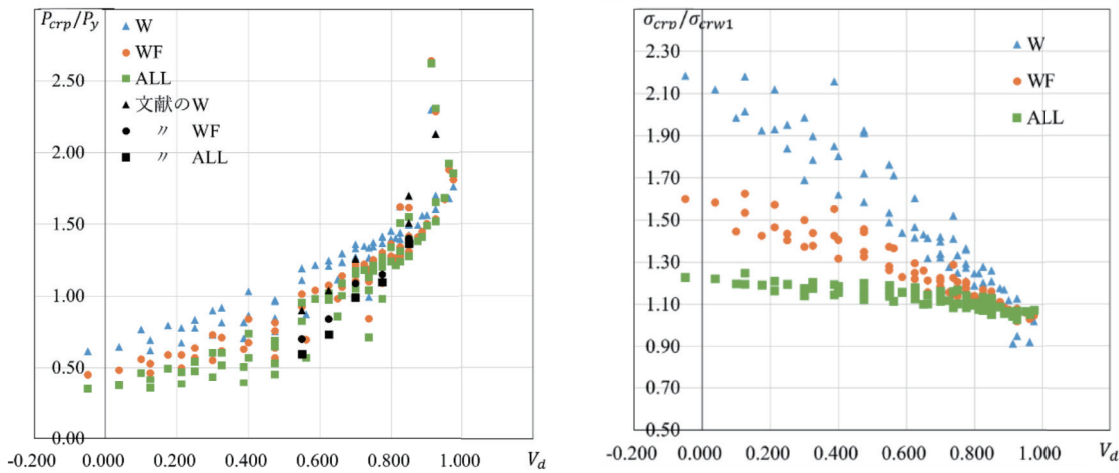
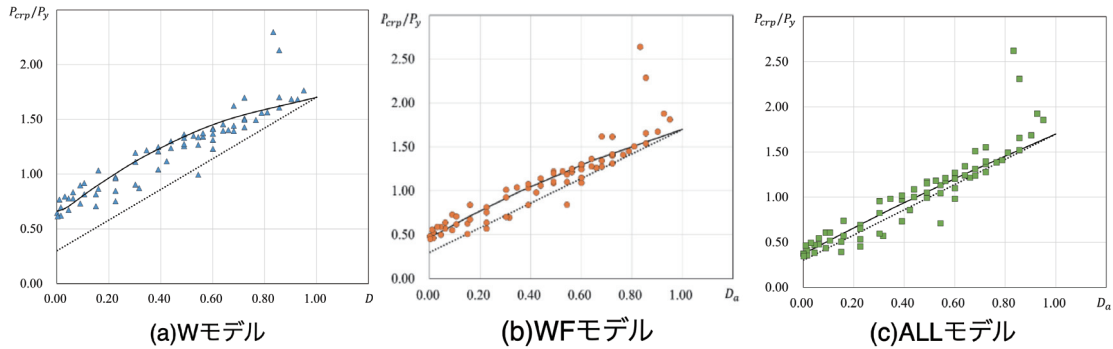


図1  $P_{crp}/P_y$ - $V_d$ 関係

図2  $\sigma_{crp}/\sigma_{crw1}$ - $V_d$ 関係



(a)Wモデル

(b)WFモデル

(c)ALLモデル

図3  $P_{crp}/P_y$ - $D_a$ 関係

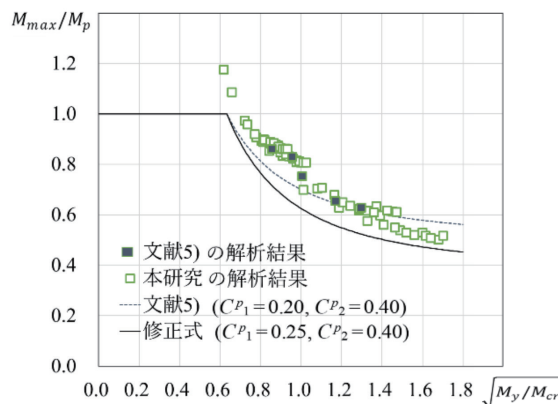


図4  $M_{max}/M_p$  -  $\sqrt{M_y/M_{cr}}$ 関係(ALLモデル)



# 剛体折り紙構造のトポロジー最適化手法の開発 - ミウラ折りユニットに対する試み -

大竹 智也 (張研究室)



梗概はこちら

本研究では折紙構造における軽量化に着目したトポロジー最適化手法の提案を目的とする。従来の構造最適化手法では折紙構造のような連続的に形状が変化できる不安定構造物には適用できない。そこで、折紙構造の畳み込み過程から離散抽出した各段階に対して静的線形解析による構造解析を行い、ESO法を適用し全ての段階に共通して利用率の小さい箇所を削除する手法を試み。削除の際に生じるモデルの不連続性を修正し、解析エラーを防ぐ処理を導入することで計算の安定化を図った。この工程を繰り返すことでトポロジー最適化手法をGrasshopperで実装した(図1)。

ミウラ折りユニットを用いた検証の結果、利用率を2%以上と設定した場合、6周目の計算で約27.7%のメッシュ削減に成功し(図2)、同時に1自由度の畳み込み性能を維持できることを確認した(図3、4)。より複雑かつ大規模なモデルへの適用や処理速度の向上が今後の課題として挙げられる。

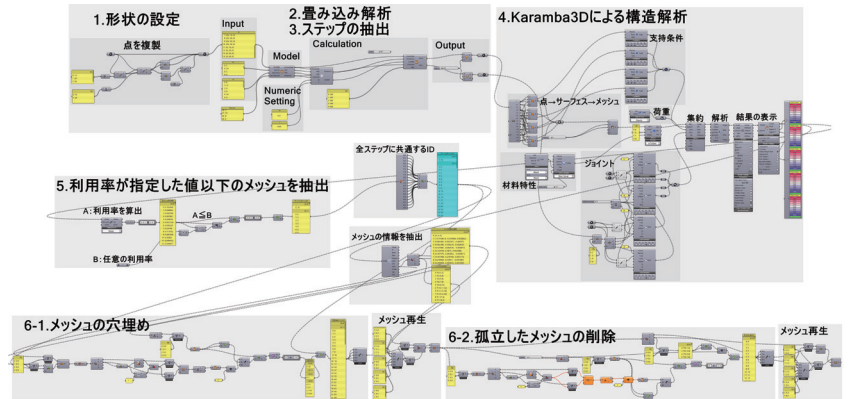


図1

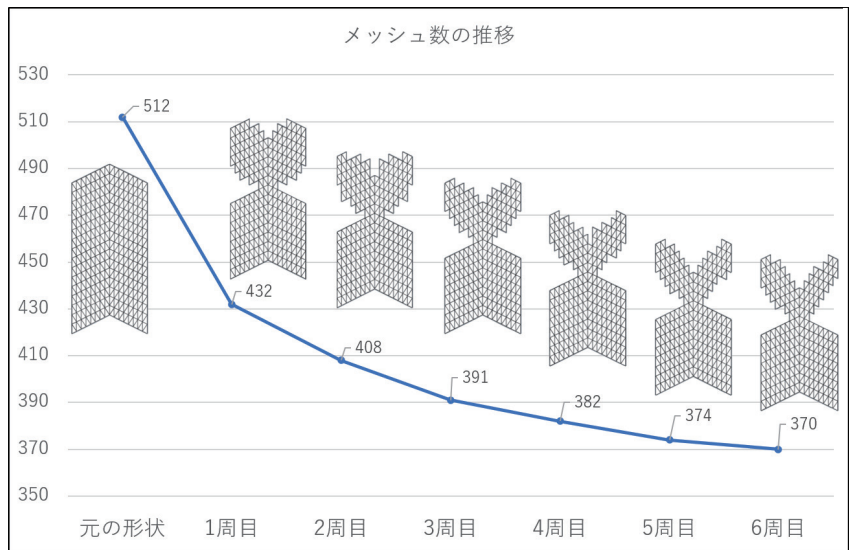


図2

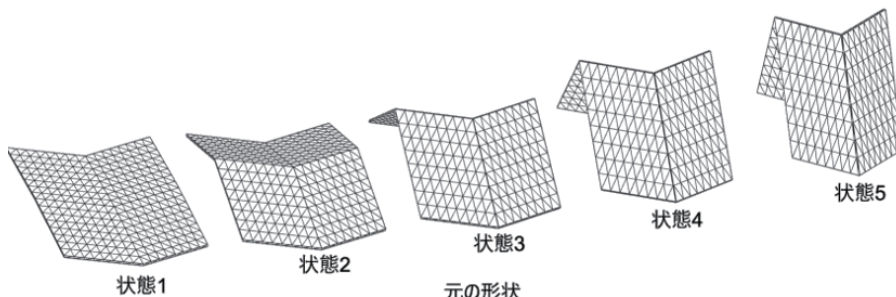


図3

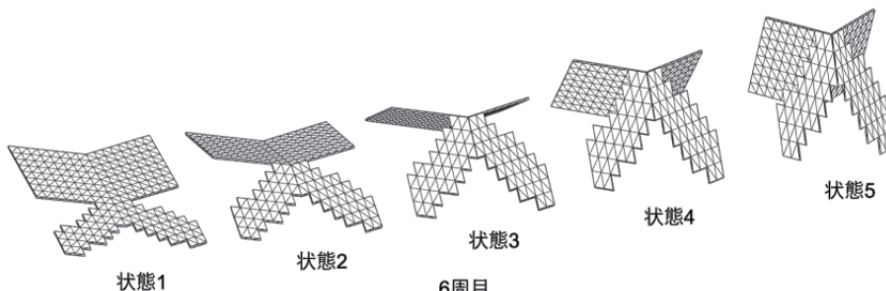


図4

## 最適な建築空間を創造する

人間をとりまく社会動向や、人間の行動・意識の法則など、様々な視点より最適な建築空間について考えます。建築デザインには、そこに至るプロセスも重視されます。専門科目としては、建築成立の社会背景、空間構成原理、環境や人への影響を理解し、責任ある建築家、技術者として行動できる能力を身に着ける『建築計画概論』、建築のことは図面表現の基礎を学び、手のトレーニングとスケール感を養う『デザイン基礎Ⅰ』などがあります。

## 設計・計画系の研究活動

設計・計画系の研究では、建物やまちの使われ方を調べる研究活動と、それら使われ方の知見に基づいてより良い建築をデザインする設計活動を行います。研究活動では、すでに社会に存在している建物やまちのことを調べます。まちに出て建物や街並みなどを調べる「実測調査」「フィールドワーク」、建物がどのように使われているのかを検証する「行動観察」などの手法により、現状を正しく把握します。また、建物には使う人がいます。使う人がどういう意識を持っているのかを利用者や運営者にきく「アンケート調査」「ヒアリング調査」などを通して、人と建物の関係を把握します。設計活動では、いま社会に必要な建物はこういったものなのか、美しい空間はどのようなものなのか、といった探求を繰り返します。また、計画系の研究室では、建築的思考をめぐらせ様々なデザイン行為を行う、社会と連携したプロジェ

## 設計・計画系の研究テーマ

研究テーマは、研究室の教員とディスカッションをしながら、各々が主体的に研究テーマを設定します。社会で起きている興味深い事象を見つけてその理由を探求するものや、現代社会の課題をデザインを通して改善するもの、街を丹念に観察して、個性豊かな建築に昇華させるようなものなどがテーマとして設定されます。

(文責 / 計画系教員 佐藤布武)





# インクルーシブ公園における整備前後の評価と課題に関する研究：整備担当者・福祉団体・一般利用者の視点に着目して

都築 萌（生田研究室）

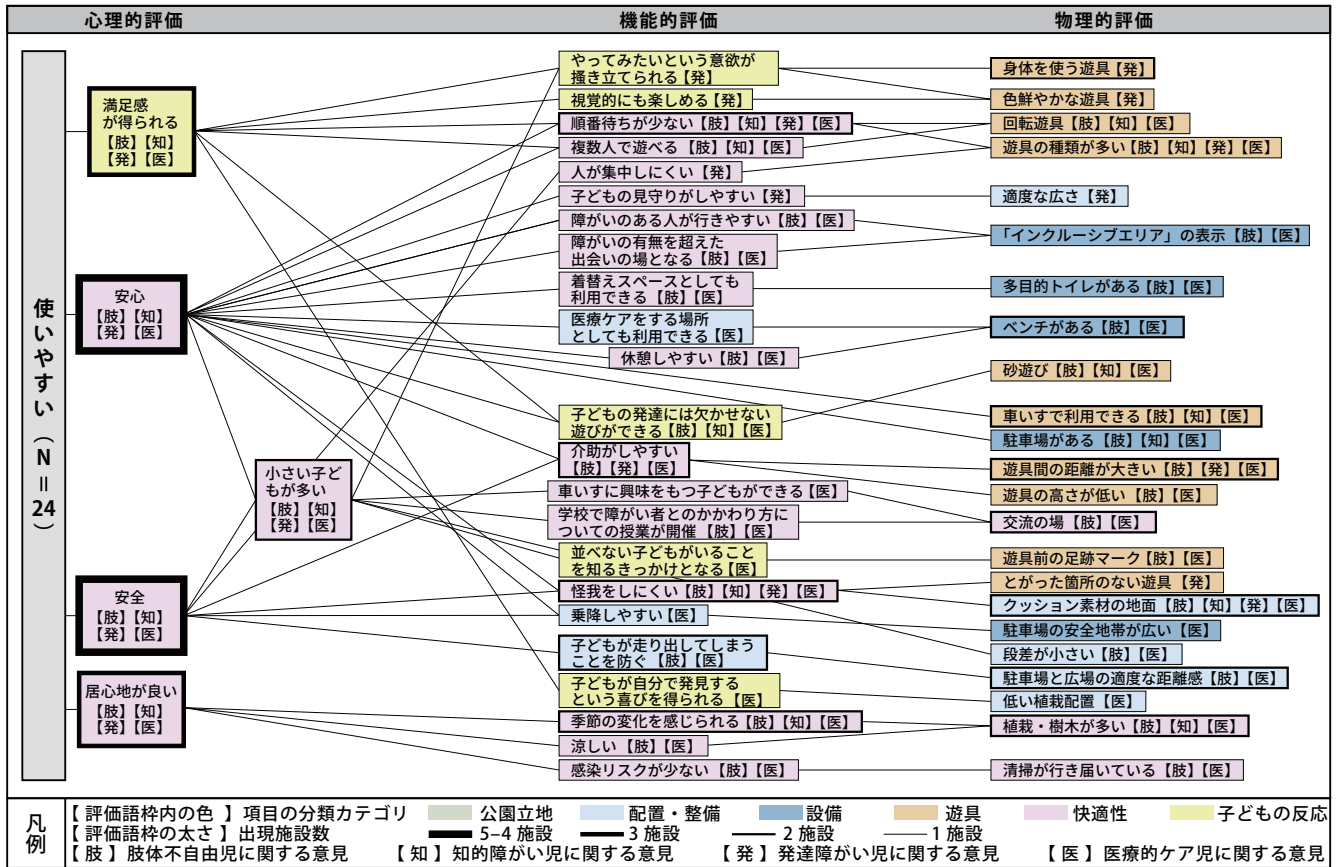


図1 「使いやすさ」に関する評価構造の統合図 (N=24)

本研究は、インクルーシブ公園の整備にまつわる整備担当者・福祉団体・一般利用者の視点から、整備における配慮点や課題、整備過程の連携の実態を明らかにしたものである。調査は、①インターネットによる全国的な整備傾向の把握、②整備担当者アンケートによる整備方針や設置実態、判断プロセスの整理、③整備担当者ヒアリングによる意見聴取や設計体制、住民連携の把握、④福祉団体ヒアリングによる「使いやすい点/使いにくい点」から求められる配慮事項の抽出、⑤一般利用者インタビューによる利用実態と評価を明らかにした。自治体は、予算や既存施設、住民意見などの要素が絡み、初期段階から福祉団体の意見を取り入れた場合に満足度が高い傾向がみられた。福祉団体は、段差の少なさや動線の広さなどの物理的環境が「安心」「安全」「居心地の良さ」という心理的評価につながり、「やってみたいという意欲」「発達に欠かせない遊び」という「子どもの反応」や「満足感」が共通評価となっていた。一般利用者は、「遊具の充実」「空間の広さ」「立地の利便性」が共通するニーズであった。以上から、インクルーシブ公園は特定の利用者のための空間ではなく公共空間の質を高める取り組みで、計画段階での適切な意見収集と、遊具・設備の選定基準を共有する仕組みが重要であることが明らかになった。

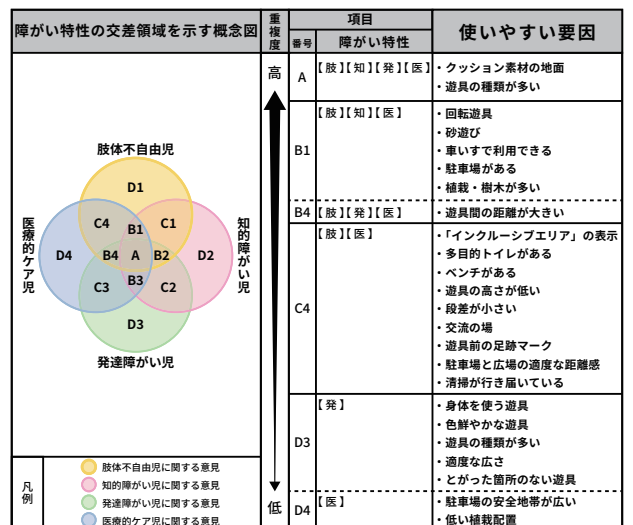


図2 整備重複度からみる「使いやすさ」の整理図

表1 公園に対する一般利用者の評価

項目	魅力点
空間環境	空間の広さ・開放感 霧気の良い良さ 安全性
利用環境	遊具・設備の充実 過ごしやすさ 清潔さ・管理状態
利用のしやすさ	立地の利便性 混雑状況

広々としていて走り回れる / 遊具間の距離が過度で混雑しにくい / 視界が開けており見守りがしやすい  
木陰が多く休憩しやすい / 自然が多く落ち着く  
見通しがよく安心して遊ばせられる / 危険箇所が少ない  
年齢差のある子どもが同時に遊べる / 身体の使い方を工夫できる遊具が多い  
ベンチや休憩スペースが適切に配置 / 見守りがしやすい  
トイレが清潔  
自宅から近く短時間でも利用しやすい / 生活動線（保育園・学校・買い物）とつながっている / 駐輪・駐車スペースが使いやすい  
混雑しにくくゆったり過ごせる / 他の利用者との距離が保ちやすい



梗概はこちら

本研究は、住宅屋外空間で運営されるマイクロ・ライブラリー「きんじよの本棚」を対象に、私的空間において本を媒介とした活動がいかになら成り立っているかを明らかにすることを目的としている。町田市の住宅屋外空間の事例を対象に、アンケート調査、現地観察、実測調査および図面分析を行い、①運営方法、②什器の設置形態、③什器の設置環境の三つの側面から整理した。その結果、運営は個人・家族単位で担われ、生活リズムや天候条件に応じて柔軟に調整され、什器は置き型を基本とし可動性が重視されていること、設置場所は私有地内の敷地境界付近に集中し、視認性と生活への配慮が両立されていることが明らかとなった。以上より、運営者の生活に根ざした運営方法を起点として、什器の設置形態や設置環境が相互に調整されることで成立している活動であるといえる。日常的な生活空間を基盤としながら公共性を内包する新たな空間活用の一形態として位置づけられる。

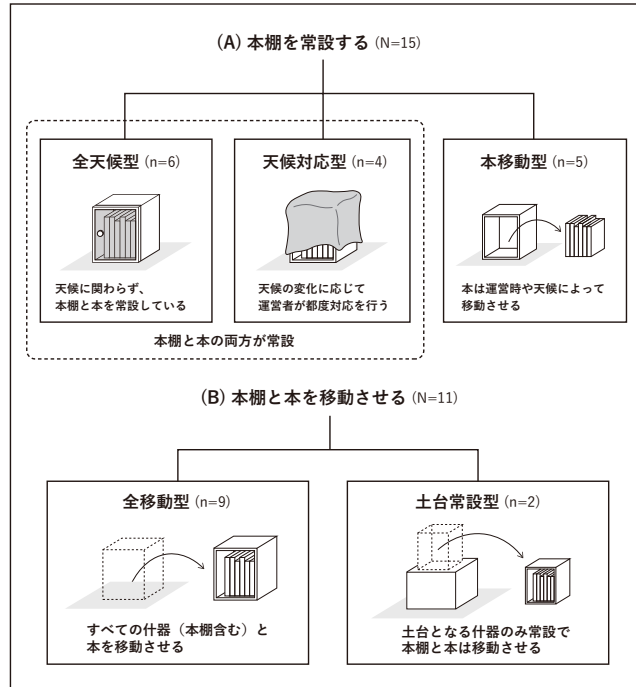


図1 運営方法の類型化

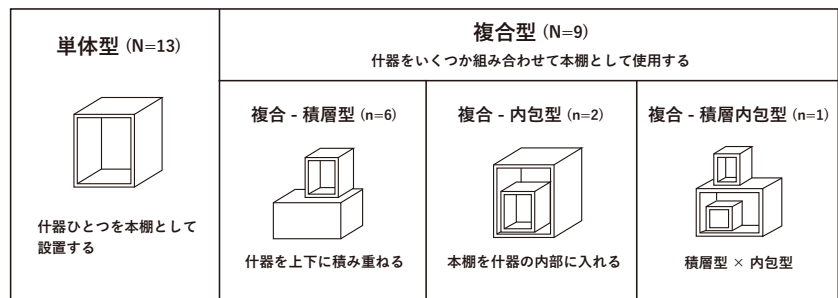


図2 什器の構成の類型化

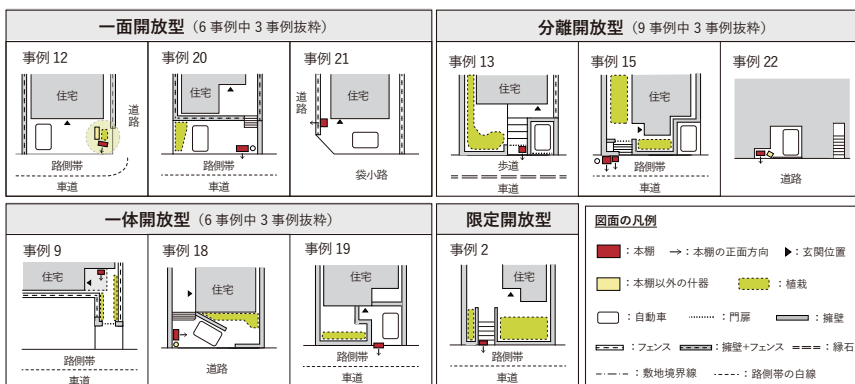


図3 開放性類型別にみた空間構成図

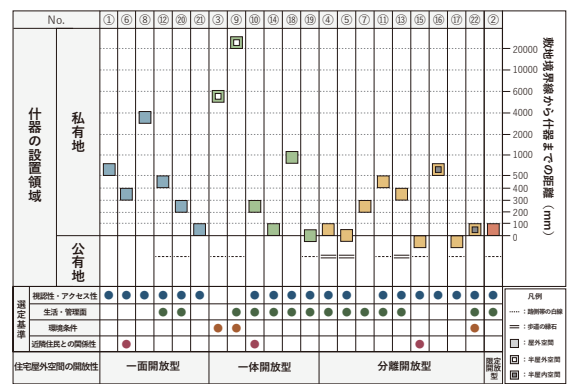


図4 什器の設置環境に関する分析結果の統合図



# 地域の内外をつなぐ機能を有する小規模宿泊施設に関する研究

森本 莉央 (佐藤研究室)



梗概はこちら

本研究は、地域の内外をつなぐ機能を有する小規模宿泊施設に着目し、その実態と地域への影響を明らかにすることを目的とした。近年、働き方の多様化や都市生活の見直しを背景に、地域との関わりに関心を持つ人が増えつつある。こうした動向を踏まえ、宿泊施設の果たす役割に着目した。インターネット調査、アンケート調査、現地調査を通じてこれら施設の実態を整理した結果、空間構成や運営の工夫によって、宿泊者と地域住民との接点が生み出されていることが確認された。更に、レポート利用や移住、新規事業の展開も確認され、宿泊という一時的な行為にとどまらず、地域との多様な関わりを生み出す拠点として成立している実態が明らかとなった。人口減少や地域コミュニティの希薄化が進む中、地域外の人との関係構築は多くの地域に共通する課題である。訪れる人が地域と段階的に関わることを可能にするこれらの施設は、地域の内外をつなぐ場として新たな可能性を有している。本研究の成果が、今後の地域に関わる場づくりを考える上での一助となれば幸いである。

表1 地域の内外をつなぐ仕組み

	宿泊者への影響	地域住民への影響	運営の工夫	空間の工夫
一時的な利用 (宿泊、施設利用)	①地域住民との接点 (宿泊、施設利用) 観光行動の変化	①宿泊者との接点	・宿泊以外の用途の併設 ・イベントの開催 ・地域情報の共有 (多様な人の施設利用を促す)	・宿泊者と地域住民が同一空間を共有する構成 ・街路に面した一階部分の開放
継続的な利用 (レポート利用、日常利用)	②レポート利用	②日常的な利用 継続的な付き合い	・地域情報の共有 ・人と人をつなぐ (地域との関わりを深める)	・短時間利用から長時間滞在までを受け止める空間構成 ・利用の仕方を限定しない共用空間
新たな展開 (移住や新規事業の展開)	③移住・定住や 新規事業の展開	③活動・事業の展開	・移住・事業展開に向けたサポート ・多様な主体によるイベント開催 (長期的な関わりを支援する)	・中長期滞在を可能とする空間構成 (※キッチン等の設備を含む) ・多様な使い方が可能な空間

表2 各事例におけるエリア別の面積

No.	所在地	立地	建築ストック	面積 (㎡)			
				延べ床	運営者エリア	宿泊者エリア	一般開放エリア
1	北海道札幌市	都市	店舗兼住宅	285.30	23.56	220.24	41.50
2	和歌山県和歌山市	都市	店舗兼共同住宅	559.51	10.93	391.45	157.13
3	静岡県三島市	地方都市 (観光地)	店舗兼住宅	148.02	14.08	93.57	40.37
4	長野県松本市	地方都市 (観光地)	宿泊施設 (旅館)	269.96	26.49	152.37	91.10
5	愛知県新城市	地方 (観光地)	共同住宅 (社員寮)	281.55	25.55	154.83	101.17
6	和歌山県東牟婁郡智勝浦町	地方 (観光地)	店舗	118.72	5.82	86.01	26.89
7	茨城県久慈郡大子町	地方 (観光地)	宿泊施設 (合宿施設)	354.98	56.10	249.83	49.05
8	福井県大野市	地方 (観光地)	住宅 (農家住宅)	177.97	31.52	64.07	82.38
9	静岡県賀茂郡南伊豆町	地方 (非観光地)	コミュニティスペース	148.91	20.70	81.84	46.37
10	鹿児島県肝属郡錦江町	地方 (非観光地)	店舗兼住宅	200.73	32.58	56.94	111.21

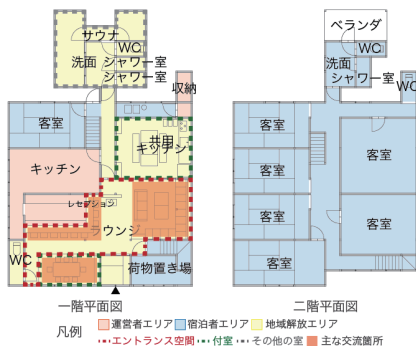


図1 施設内での交流状況の例 (左:空間, 右:時間帯)

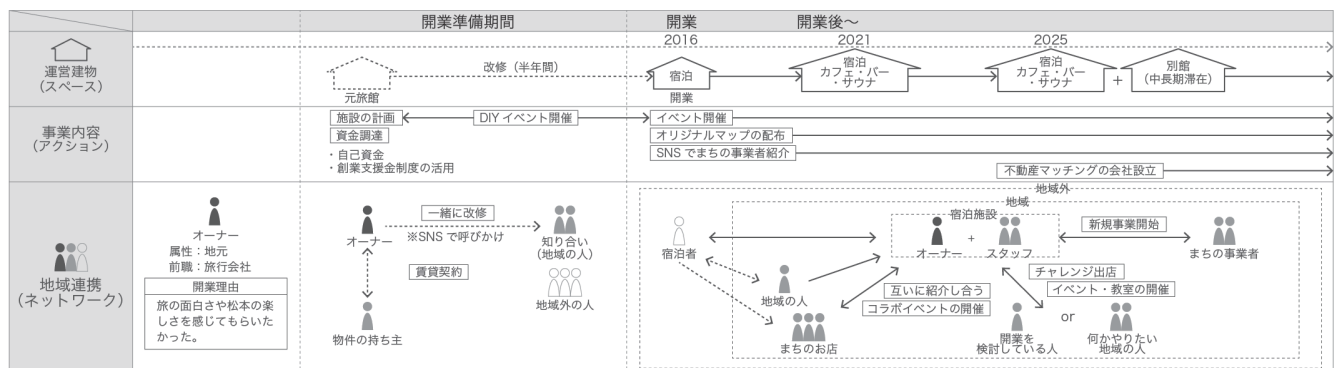


図2 事業展開の例

# 日常と非日常の比較による都市空間の滞留誘発条件の解明

—名古屋市オアシス21を事例として—

柳澤 千尋 (萩原研究室)



梗概はこちら

本研究は、名古屋市オアシス21を対象に平常時（日常）とイベント時（非日常）の滞留行動を比較分析し、都市公共空間における滞留誘発条件を解明することを目的とした。調査では行動観察に基づくプロット調査を行い、滞在人数の増減量と平均滞在時間を指標として、細分化した各ゾーンを4つのタイプに類型化した。分析の結果、イベント時にはグループ来訪率の上昇傾向を示し、飲食ブース周辺から隣接ゾーンへと滞留が分散するプロセスが確認された。類型化により、常設設備等の公式な座り空間が滞留を「定着」させる機能や、動線空間が「流動的にぎわいの受け皿」へと質的に転換する実態が明らかになった。また、高さ約40cmの段差や芝生等の非公式な座り空間が収容力を拡張させ、壁面等の境界要素が心理的の拠点として滞在時間を維持・延長させる役割を担っていた。結論として、多様な属性や目的に対応するため、多層的な空間設計の重要性を提言した。

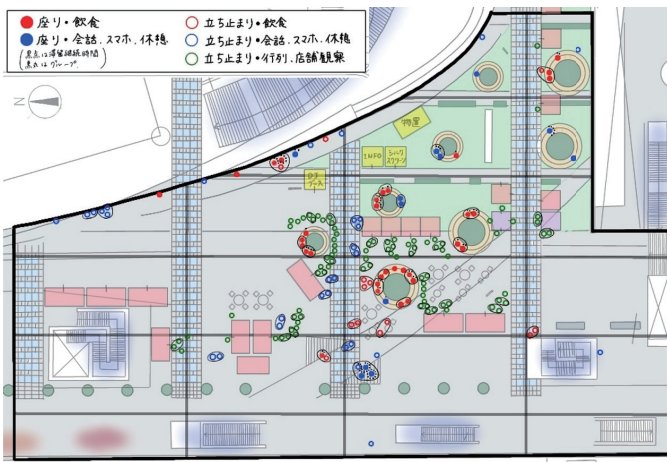


図1 プロット調査例  
(南西側イベント時 2025/11/08 12:00)

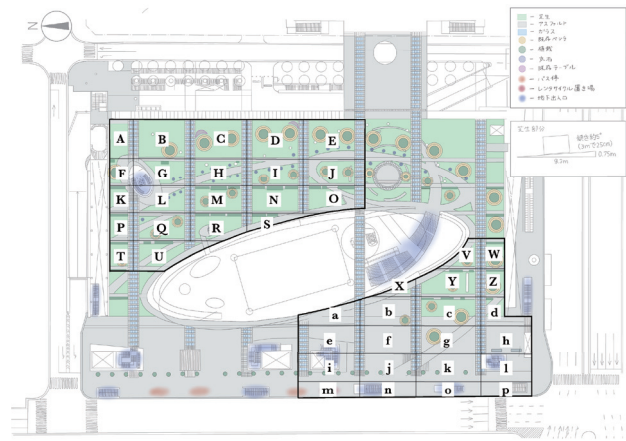


図2 建ゾーン分け区分図

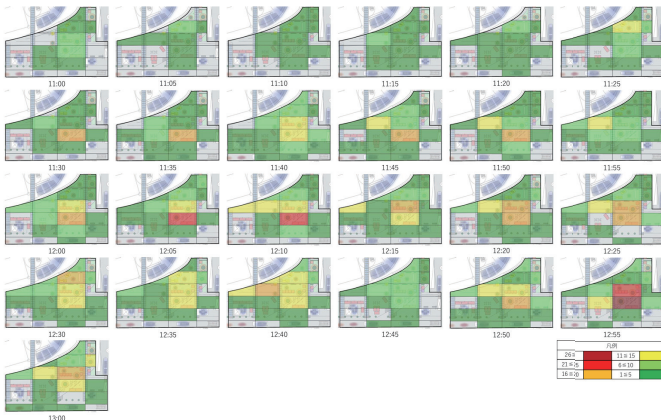


図3 プロット調査ヒートマップ表示  
(南西側イベント時 2025/11/08)

	滞在人数の増減	
	増加（プラス）	減少（マイナス）
長期滞在 (10分以上)	C, D, F, J, Q, T, V <b>→タイプ1</b> 「滞留創出・定着型」	H <b>→タイプ2</b> 「日常的滞留優位型」
短期滞在 (10分未満)	A, B, E, G, I, K, L, M, N, O, P, R, S, U, W, X, Y, a, b, c, e, f, g, h, l, j, k, l, n, o <b>→タイプ3</b> 「高流動・にぎわい型」	Z, d, m, p <b>→タイプ4</b> 「機能変化・通過型」

図4 滞在人数の増減と滞在時間によるタイプ分け

タイプ (代表 ゾーン)	滞在 特性	姿勢と目的 (平常時)	姿勢と目的 (イベント時)	考察
タイプ 1(C)	長期× 増加	座り飲食が 一定数存在。	座り飲食が 急増。一部 で立食も発 生。	常設の設えで平常時・イ ベント時通じて座り滞 在が多いが、イベント時 の飲食利用者増加に伴 いその滞在目的が変 化。
タイプ 2(H)	長期× 減少	長時間の立 ち止まり休 憩が主体。	立ち止ま り・座り休 憩がともに 減少。	静かさなど平常時の環 境に依存した休憩行動 がイベント開催での人 流増加で見られにく くなった。
タイプ 3(c)	短期× 増加	短時間の立 ち寄り・座 り休憩が中 心。	座り飲食が 急増。その 他すべてに おいて増加。	動線空間の流動性は 維持しつつ、イベント が飲食の場へと質を 転換させたことで飲 食目的が増加。
タイプ 4(Z)	短期× 減少	立ちどま り・座り双 方での休憩 利用が多い。	飲食需要に 押され、相 対的に休憩 目的が減少。	場所固有の価値は 維持されるが、イ ベントに影響され 飲食への滞在目的 のシフトがみられた。

図5 各タイプの代表ゾーンでの行動特性とその考察

## 快適な空間を創出し建物を維持する

光・音・熱・空気・水を適切にコントロールすることで初めて快適な空間が創造できます。ただし、そのための環境負荷を最小限にするための知恵と努力が必要です。専門科目では次のような科目を通して、理解を深めます。『建築環境概論』では、建築空間の熱・空気・光・音環境の基礎を学び、建築における環境計画の重要性を認識します。『建築設備概論』では、空調・給排水・電気設備の必要性とそれぞれの専門分野に必要な基礎知識を修得します。

## 環境・設備系の研究手法

環境・設備系の研究は、建築や都市を安全・安心、そして快適な空間に設計、あるいは維持管理するために行われています。そして、省エネルギーや低炭素化など持続可能な社会へ向けて貢献することも環境・設備系の研究には求められています。主な研究手法には、フィールド調査、実験室実験、シミュレーションによる解析があります。フィールド調査は実在する建築や都市を対象に調査を実施して、その実態を把握します。実験室実験は、建築や都市の多様な環境要素から単純なモデルを実験室で再現して、着目した要素の特性や関係性を明らかにします。計画中の建築や都市の分析・評価、あるいは様々なケースの比較など再現が不可能、困難なテーマではシミュレーションにより解析を行います。研究の視点としては、建築や都市の機能や性能などモノを主な対象とする研究、建築や都市を利用するヒトとの繋がりを主な対象とする研究があります。

## 環境・設備系の研究テーマ

建築室内と屋外における音響設計・予測・評価・制御に関する研究

- ・音響計画・建築環境教育に関する研究
- ・建築や都市の温熱環境評価、温熱環境や光環境の人体生理・心理反応に関する研究
- ・建築と都市の省エネ・低炭素化を目的とした建築環境・建築設備に関する研究

(文責 / 環境・設備系教員 石井仁)



# 大規模病院の熱源システムにおける運用制御とエネルギー性能の分析

空野 佑真 (吉永研究室)



梗概はこちら

本研究では、愛知県長久手市に建つ愛知医科大学病院の熱源システムに対して、1年分の運転管理記録データをもとに Python で運用状況を分析した。

結果、年間の冷熱需要は温熱需要の約 2.1 倍であり、冷熱需要が卓越していることが分かった。負荷熱量に対して目安とする熱源台数制御方針との整合性を確認したところ、冷水では 2 割、温水では 3 割の時間で制御方針と異なる熱源機の組合せで運用されていたことが分かった。また、2 台の水冷チラーのうち 1 台が他方に比較して COP がやや低く、過去に井戸水を冷却水に利用していたことで内部熱交換効率が低下したと推察された。

二次側往温度の分析の結果、冷暖房期ともに、約 1 割の時間で設定値からの乖離が見られた。背景要因を探ったところ、冷水では、二次還ヘッダーから二次往ヘッダーへの逆バイパスの発生と、負荷増大への水冷チラーの追従遅れに起因すると分かった。また温水では、逆バイパスの発生と蒸気 - 水熱交換器の流量抑制が主な原因であった。

これらの結果は対象施設にフィードバックされ、改善方法が検討されている。

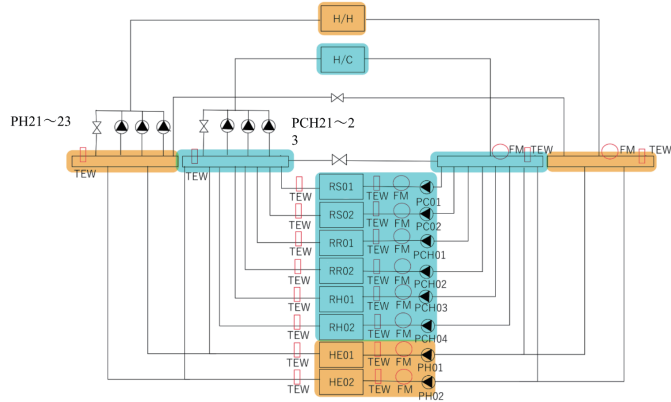


図 1 熱源システム

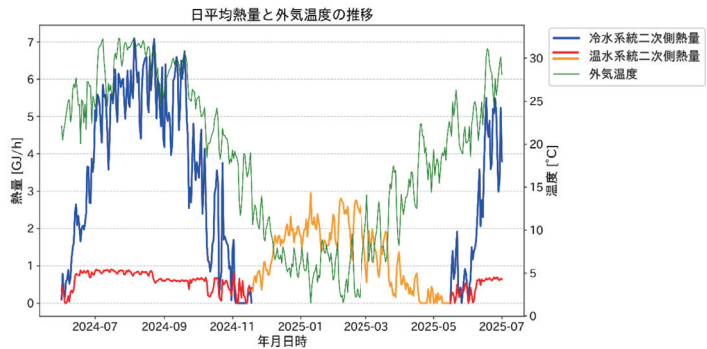


図 2 日負荷熱量の推移

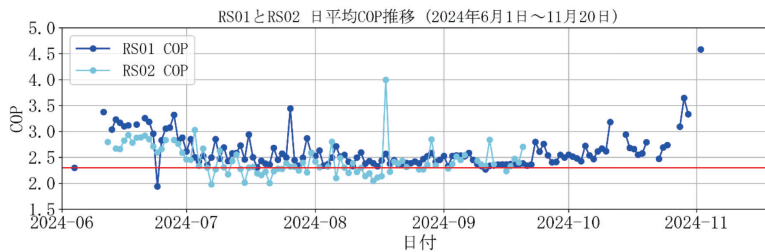


図 3 水冷チラー 2 台の日平均 COP の推移

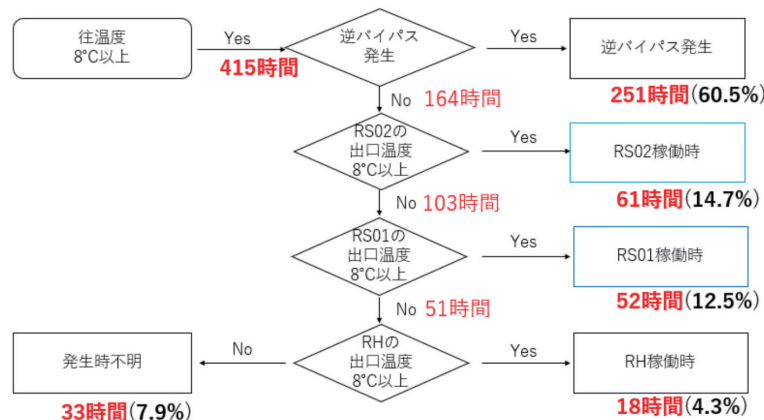


図 4 冷水往温度が高い原因の分析フローチャート

## 建築の創造は歴史にある

建築は、つねに経験（歴史）に基づいて発展を繰り返しています。建築の創造の歴史は、同時に建築の歴史に学ぶという歴史です。この分野は次の専門科目を通して知識と見方を深めます。『建築史概論』では文明の変遷と建築表現の相関を学び、『日本建築史』『西洋建築史』で異なる文化それぞれの変遷を理解します。『近代建築史』は近代の発展過程を理解し、『アジア建築史』では、あまり知られていないアジア建築の変遷を学びます。

## 歴史・意匠系の研究手法

歴史意匠系の研究は、歴史的な建物はもちろん、都市や集落、庭園、大工やその技術、建築家とその作品・言説、世界遺産や文化財の制度・保存活用、建築とは何かという哲学的な問いまでその対象は様々です。そのため研究手法も多岐にわたります。代表的なものに、建造物の実測などの「現地調査」と、文書や絵図・書物などを扱う「資料・文献調査」があります。「現地調査」では建物やまちなみを実測、記録することでその設計理念・形成過程を把握したり、多くの実例を見ることで全体の傾向や背景の原理・文化を見出したりします。「資料・文献調査」では、種々の資料を組み合わせ、深く読み込むことで、建物そのものからは見えてこない物事や空間の特質を探求します。他にも、図面や模型、映像作品を用いた近現代建築の研究や、他系の実験・計測の手法を応用・援用した研究などもあります。資料の発見や研究手法の工夫も歴史意匠系の研究の面白さの1つです。

## 歴史意匠系の研究テーマ

歴史意匠系では建築に関わる全ての要素が研究対象になります。そこには、歴史的な視点や原理を求める眼差し、建築にまつわる事象の「なぜ」への探求があり、時代に流されず、俯瞰する視点でテーマを設定します。各自の研究テーマは基本的に各々の興味によって決め、指導教員とのやりとりを通して、具体化していきます。

（文責 / 歴史意匠系教員 米澤貴紀）





梗概はこちら

## ①ドレープ



写真1 国立代々木競技場



写真2 ドレス

## ②飾る



写真3 反住器



写真4 髪飾り

## ③プリント



写真5 阪神甲子園球場



写真6 花柄プリント

## ④スキンの構造化



写真7 住吉の長屋



写真8 ポールドルック

## ⑤プリーツ



写真9 群馬音楽センター

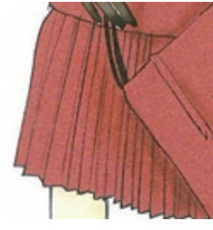


写真10 プリーツスカート

引用: [do.co.mo.japan](https://docomomojapan.com/), <https://docomomojapan.com/>

引用: 城一夫, 渡辺直樹, 「日本のファッション 明治・大正・昭和・平成」, 株式会社青幻舎, 2012

図1 本研究で扱うフォルム要因

本研究は、社会学の視点から建築文化と服飾文化との「運動」を抽出することを目的としている。2007年に開催されたユニークな展覧会「スキン+ポーンズー1980年以降の建築とファッション」など、近年では新たな解釈の可能性が指摘されている。そこで本論では1920年から1980年代の半世紀にわたる国内での流行現象を追い、両者の関係について再検証を試みた。「ドレープ」「飾る」「プリント」「スキンの構造化」「プリーツ」など、フォルム要因となる技法に着目した形式分析を行い「ルック（服飾の見た目）」と「外観（建築の通常望見できる範囲）」における相関性を論じた。結果、1970～80年代にかけては両分野で「ドレープ」および「飾る」が相対的に強まる点に共通性が認められ、「スキンの構造化」は建築では1930年代以降も高い割合で継続し、外観が構成原理として持続しているのに対し、ファッションでは流行として循環的に現れるなど、新たな解釈・考察につなげている。

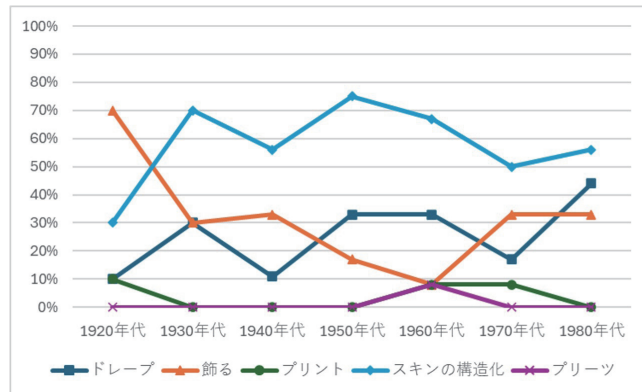


図2 建築における表現技法の出現割合の推移 (1920～1980年代)

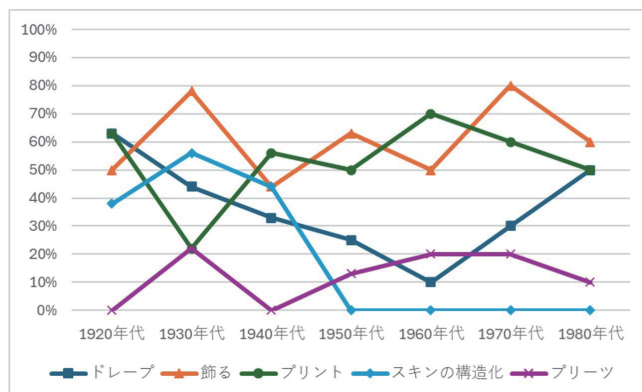


図3 ファッションにおける表現技法の出現割合の推移 (1920～1980年代)



# ブリュゲルの建築物表現に関する研究

茂谷 唯（米澤研究室）



梗概はこちら

本論文は、16世紀フランドルを代表する画家であるピーテル・ブリュゲルの作品を対象に、絵画の主題と、画中に描かれた建築をはじめとする諸要素との関係性に着目し、それらの分析を通じて、彼の絵画における建築表現の特徴を明らかにしたものである。ブリュゲルの油彩画30作品について、描かれた建物の画面に占める割合、屋根勾配、素材の種別、向き・形状、画面中の棟数、特に聖堂の数、遠景に描かれる街などの建築要素を計測、抽出し、主題とも併せて分析、考察した。そしてブリュゲル作品の建築物には、屋根勾配、建物形状、建築部材、建物の種類といった要素において特定の傾向があることを明らかにした。彼は、これらを重要な手段として捉え、使っていたと推測でき、その建築表現は、単なる背景要素にとどまらず、画面全体の現実感を高めるとともに、実際に即した意匠を取り入れることで鑑賞者に親近性を与える役割を担っていたと結論した。



図1 一点透視図法を用いた例（「謝肉祭と四旬節の喧嘩」）

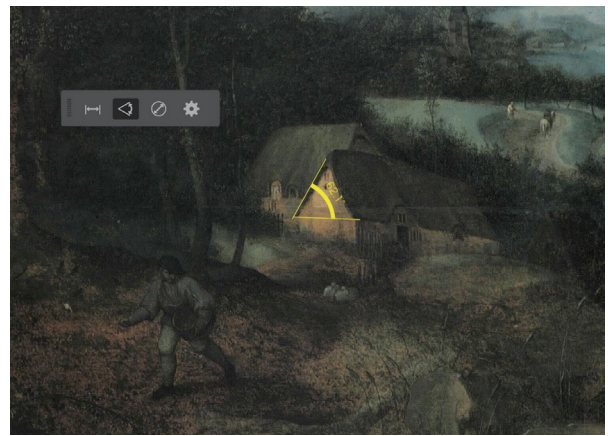


図2 屋根勾配の測定方法（「種まく人の警えのある風景」）



図3 二階を張り出す当時の都市部にみられた住宅形式（「ベツレヘムの嬰兒虐殺」）



図4 描かれた大聖堂（「鳥罾のある冬風景」）

## 建物に用いられる材料

建物を作るにはまず材料が必要です。その性質をしっかりと把握し、適材適所で材料を使用していく必要があります。また、その材料を使用して実際に建物を作るためには、どのようになり方で行うかを計画し、段取りを組んで行っていく必要があります。また、近年では完成後の維持保全も重要になっており、劣化が進んだ建物をどのように診断し、どのように補修・補強を行うかを考える必要が出てきています。このように材料・生産系は、建物を作る際に用いられる材料や、実際の作り方、さらにその維持保全の方法を学びます。材料・生産系の専門科目には、建物を形作っている様々な材料について、その性質や特徴を知り、その上で選択できるよう、建築材料全般について学ぶ『建築材料概論』、実際に建物を作る際にどのように作っているのか、そ

## 材料・生産系の研究活動

材料・生産系の研究では、主に実験を通じて材料の性質を把握し、そのメカニズムを検討することを行います。材料の研究では、実験室で実験を多く行います。セメントと水と細骨材、粗骨材を計量して、ミキサーで練り混ぜる。生コンの研究なら練ったらすぐその性質を測定します。硬化コンクリートの研究なら、型枠に打設して硬化を待ち、脱型後しばらくしてから硬化したコンクリートの圧縮試験などをやってその性質を測定します。これら測定した性質が、狙った通りにできているか、というのがまず重要ですが、それ以上に、何が原因でそのような性質になったのか、そのメカニズムを検討することが重要です。そのメカニズムがわかれば、その性質を再現することも、さらにその性質を変化させることもどのようにやればよいのか予想がつき

## 材料・生産系の研究テーマ

[寺西研] 建設用 3D プリ  
ンティング技術に関する研究、  
建築物の劣化調査・診断技術  
に関する研究、コンクリート  
工事の品質向上技術に関する  
研究、建築物のエイジングの  
最適化に関する研究ほか [平  
岩研] 硬化コンクリートの破  
壊挙動に関する実験的・解析  
的研究、ポーラスコンクリ  
ートに関する研究、建築材料・  
施工関連の教育資料の作成

(文責 /

材料・生産系教員 平岩陸)



## News 学科 HP 掲載の内容

### 2025 年

- 04 月 10 日 大塚研究室と寺西研究室が、エフエム愛知のラジオ番組「エンジ名古屋 Road To Connect」に取材されました。
- 04 月 24 日 吉永研の 4 チームが名城大学カーボンニュートラルアイデアコンペで大賞・優秀賞を受賞
- 06 月 27 日 寺西浩司教授が、日本建築仕上学会学会賞（論文賞）を受賞しました。
- 08 月 13 日 佐藤准教授と佐藤研究室が SD REVIEW 2025 に入選
- 08 月 30 日 建築学科研究室対抗のスポーツ大会を実施しました。
- 08 月 31 日 佐藤研究室のプロジェクトが本に掲載
- 08 月 31 日 佐藤准教授が建築学会大会に併せて 2 つの講演に登壇
- 09 月 02 日 米澤准教授が共編・著の書籍『建築とオリジナル 創造・継承・解釈』を出版
- 09 月 14 日 寺西研究室の学生チームが「キング・オブ・コンクリート 2025」で総合 1 位
- 09 月 16 日 日本建築学会設計競技 2025 にて、大学院生の大津留さんと甲斐さんが全国優秀賞を受賞。  
白石くん、森本さん、伴くんは支部入選。
- 10 月 22 日 大学院・建築設計特論の最終講評会を実施
- 11 月 08 日 大須学ワークショップ 2025 の開催
- 11 月 21 日 名城大学建築学科・大学院建築学専攻 優秀論文・優秀作品集 イヤーブック 2024 を公開

### 2026 年

- 01 月 21 日 松田研究室の 3 名それぞれが日本建築学会大会で若手優秀発表賞を受賞
- 02 月 01 日 愛知建築士会学生コンペ 2025 「まちづくり部門」にて名城大学建築学科から 3 チームが最優秀賞・入賞を受賞！
- 02 月 01 日 第 41 回 JIA 東海支部設計競技にて、田中健翔さんが「銀賞」を受賞
- 02 月 14 日 2025 年度卒業設計審査会 + 作品展示開催のお知らせ





## 制作編

## 自室

担当教員

生田京子・石黒泰司・大前貴裕・佐々木司・葛島隆之・彌田徹

### 到達目標

今回、あなたは初めての設計課題として、5m 立法の自由に使用できる空間が与えられる事になった。このスペース・空間の中で、貴方の生活空間を自由に構想してほしい。近くに親がいる主屋があり、三度の食事の心配は幸いな事に、いらぬ。各自のライフスタイルや趣味などを反映した、貴方だけの「5m 立法の自己の生活 空間を考える。」自室の設計課題である。

### 身体感覚を養う課題として

空間設計の基礎として、自己の人体寸法や動作寸法、自己の生活空間を測り身体と模型で考える事。日頃から、心地良いと思った空間の広さ、高さ、座り心地のいい椅子の形と寸法・・・等を測る習慣を身につける事。自身のスケール感を養っておく事が大切である。

### 敷地

周辺環境や敷地形状などの想定は自由である。例えば、静かな森の中の湖畔でも、砂漠のオアシスの夕日を浴びる一画でも、海辺の岸壁の頂きでも、大都会のまっただ中でも、小学時代の思い出の、小さな街の分かれ道に沿った三角地でも、どこでもよい。

### 設計条件

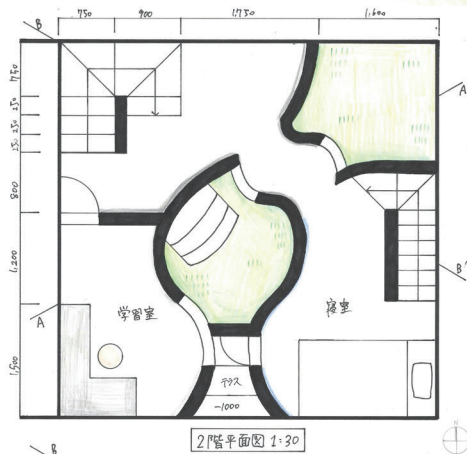
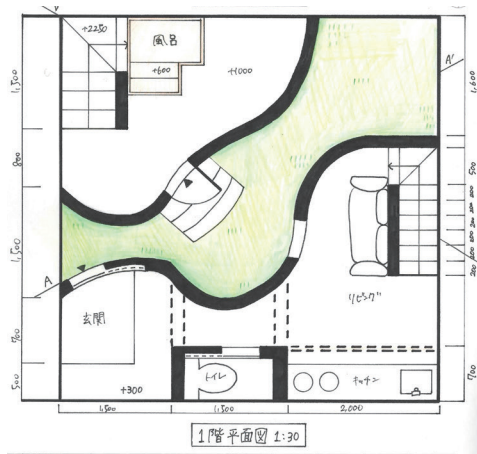
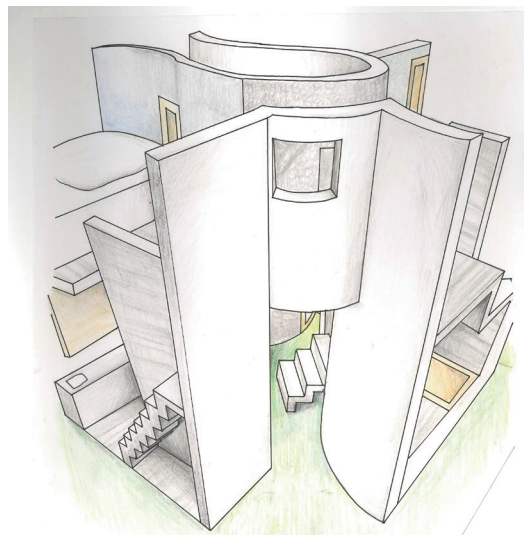
5m 立法の範囲で設計する。大きい、小さいのボリュームは認めない。はみ出た洗面コーナー等も不可。建築科の学生ゆえ、学習・製図コーナーは必須です。主屋で、すますでなく、WC、風呂も必須とする。その他は各自、自由に設定する。

(たとえば、友を招き入れてのバーコーナー、趣味のスペース等。)

## ■ 繋がる

伊藤紗良

大都市の真っ只中、施設、交通、交流など都会は便利である。しかし人混み、自然が少ない、高層ビルなど日々の疲労は蓄積する。自然をいちばん身近に、そして自分と自然を繋ぐ多様な空間計画を図る。緑が少ない都会に自然を提供し、大都市に住みながらも最大限にリラックスできる空間を提案する。



## ■ しぜんとのしらべ

大矢颯乃

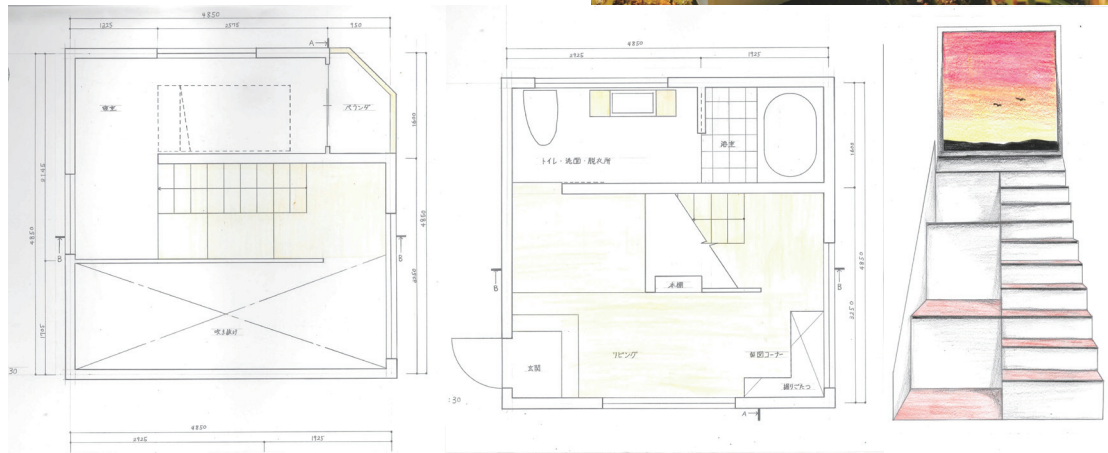
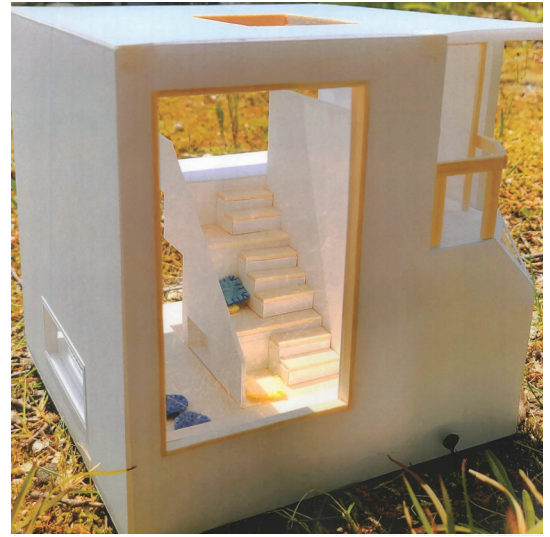
「貴方だけの生活空間を考えよ」という課題に対し、趣味であるピアノを思い切り楽しめる建築を構想した。木々に囲まれた静かな場所に建ち、壁に沿って伸び、内外を貫く階段とともに光が差し込むことで「内・外・上・下」が連続する空間を生み出している。2階はガラス張りのピアノ室とし、鳥のさえずりや風、川の音と呼応する。1階には二重壁や階段下を利用した私的空間を設けた。



## ■ 光のリビング

佐藤 椋香

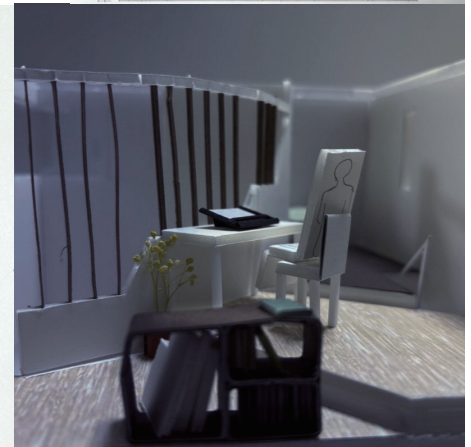
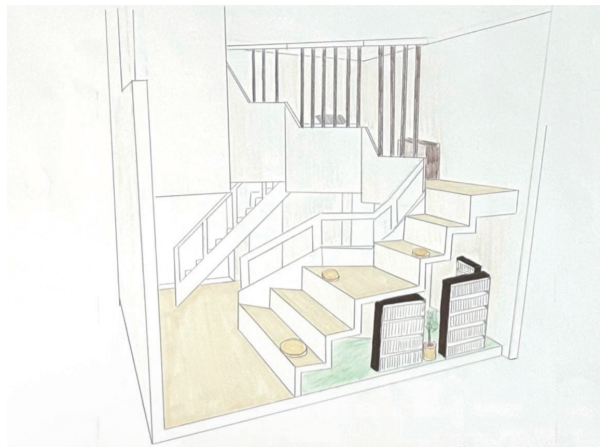
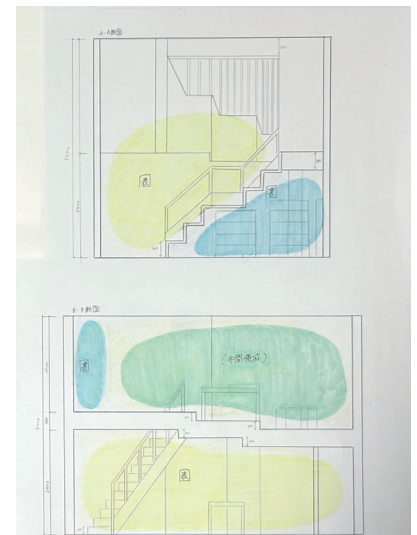
私は5m立法の空間全体をリビングのようにくつろげる場として設計した。空間を三分割し、中心に階段を配置するシンプルな構成とし、掘りごたつや座れる階段などのくつろげる要素を随所に設けた。階段前には東側に大きな窓を設け、掘りごたつに座ると足元の窓から外の景色を眺められ、天窗や2階の窓からは様々な光が差し込む。この空間では室内でごろごろとしながら、ゆったりと時間や季節の移ろいを感じられる。



## ■ 住まいの表と裏

萩原 悠奈

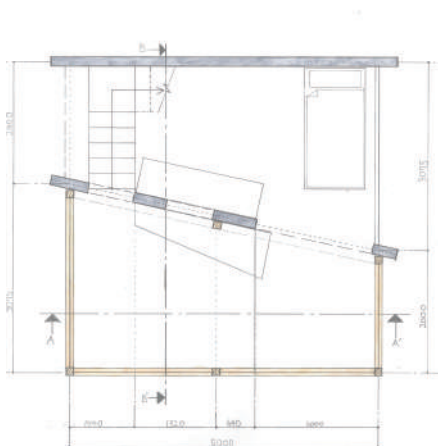
人前で過ごす〈表〉の自分と、一人でこもる〈裏〉の自分。その両方が否定されず共存できる住まいを提案した。大階段や床レベル差によって空間に連続的なグラデーションをつくり、光や視線の操作によって、時間帯や気分に応じて〈表〉と〈裏〉が緩やかに切り替わる構成としている。明確な境界を設けず、居場所の性格がにじみ合う関係性を目指した。住まい手が無理なく自分らしくいられる場を構想した。



## ■ 2つの家1つのくらし

平本宙

本計画は、RC造と木造という性質の異なる二つの「家」を内包する構成としている。木造の家は、大きな開口部により風景を積極的に取り込み、自然との連続性を高めている。一方、RC造の家は、必要最小限の開口部とすることで、プライベート性の高い内向的な空間を形成している。これら異なる性質の空間を併置することで、用途に応じた部屋の選択が可能な空間を提案する。



## ■ 視線がほどける家

山田歩実

香川県小豆島の南東部沿岸向きの斜面にて常に自然を感じられるよう計画する。

層をずらすことで空間が発生するところから、間仕切りをしなくてよくなるため閉塞感を感じずにゆとりを持った暮らしができる。

また最上階には瀬戸内海を一望できるよう大型の窓を取り付けた。



## 近隣交流施設

担当教員

生田京子・石黒泰司・大前貴裕・佐々木司・葛島隆之・彌田徹

### 到達目標

本課題では塩釜口駅付近の、街の新しい顔となる建物をデザインしてほしい。

敷地は、塩釜口駅の出入口に接する。

塩釜口駅付近は、様々な店や駐車場が混在し、賑わいがある一方で、統一感もなく、どこか街の個性を感じづらいエリアとなっている。

この街に、学生と地域の人が共に使用し交流する空間を構想し、新たに街を活性化させるような建築を考えて欲しい。

タイトルは「成長する空間・場」となっている。

このタイトルは以下のいずれととらえても構わない。

- ・学生と地域の人が交流し、成長するための場
- ・空間や場そのものが、時間経過によって変化・成長する。

### 敷地

住所 | 名古屋市天白区塩釜口2丁目

建築面積 | 303 m<sup>2</sup>

用途地域 | 近隣商業地域

建蔽率 80% 容積率 400%

### 配置機能

建物は24時間オープンを前提とする。面積は、各自で自由に設定する。

下記の1-4の機能を必ず設け、更に、下記にない機能も、自由に付け加えても構わない。

- 1 カフェ（軽食の提供・学生自身が使える簡易キッチンなど。）
- 2 学生や地域住民のサークル活動などに使えるレンタル室（会議用など。）
- 3 学生や地域住民の展示ギャラリー
- 4 学生用の制作スペース（建築学科の学生も使用!）

## Small Town

岩堀衣真

この建物を通して学生や地域住民の交流を促し、地域活性化へとつなげる。3階は日本の伝統文化である祭りをテーマに、誰もが楽しく関わられる場とした。木箱のような軽やかな店舗は積層や移動が可能で、塩釜口の実在店舗が出店することで来訪を促す。夜は光がシェード越しに漏れ、提灯のように街を照らし人を引き寄せる賑わいを生む。



## 空間・構造がもたらす心のみちくさ

鬼頭七菜

スロープは誰もが自分の意思で進んだり戻ったり、ときには立ち止まったりすることもできる。時間をかけてゆっくり行動することで、利便性や効率性を追求した動線では見過ごされがちな日常の中の新たな発見や出会いに気づけ、自然と成長に繋がって行くのではないだろうか？積み重なるボックスは、北側に大学、南側に街が広がる敷地条件を踏まえ、用途に応じて向きを変えることで両者の関係性を建築に反映している。



## Step scape

高山莉奈

「Step scape」は、段差によって人の行為と居場所が広がる風景をテーマとした空間提案である。全体を大階段状に構成し、その途中に展示、制作、カフェなどの活動をちりばめた。座る、観る、滞在するといった行為が連続的に生まれ、床レベルによる緩やかな区切りが、他者の気配を感じながら自分の時間に没頭できる居場所を生み出している。こうした段差の連なりが、日常に前向きな体験をもたらす場となることを目指した。

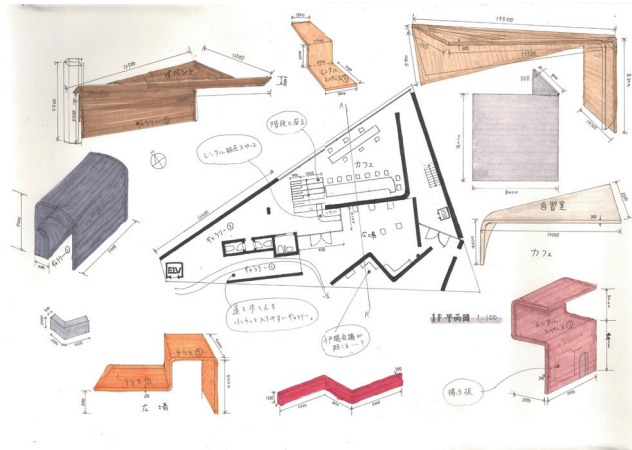


## 折れてるから居れる

豊田妃菜

開きすぎず、閉じすぎない、ふと立ち寄って少し過ごせる公共建築を目指した。「部材を3回まで折る」というルールを設定し、壁・床・天井が連続する構成とすることで、谷折りのくぼみに居場所が生まれ、角度やレベル差で視線が切り替わる空間としている。

駅前という立地に合わせ、通り抜けながら滞在もできる構成とし、半屋外ベンチや展示、カフェなど内包した、空間の折れによって生まれる自然に居れてしまう場を提案した。



## YANEKABE

平本宙

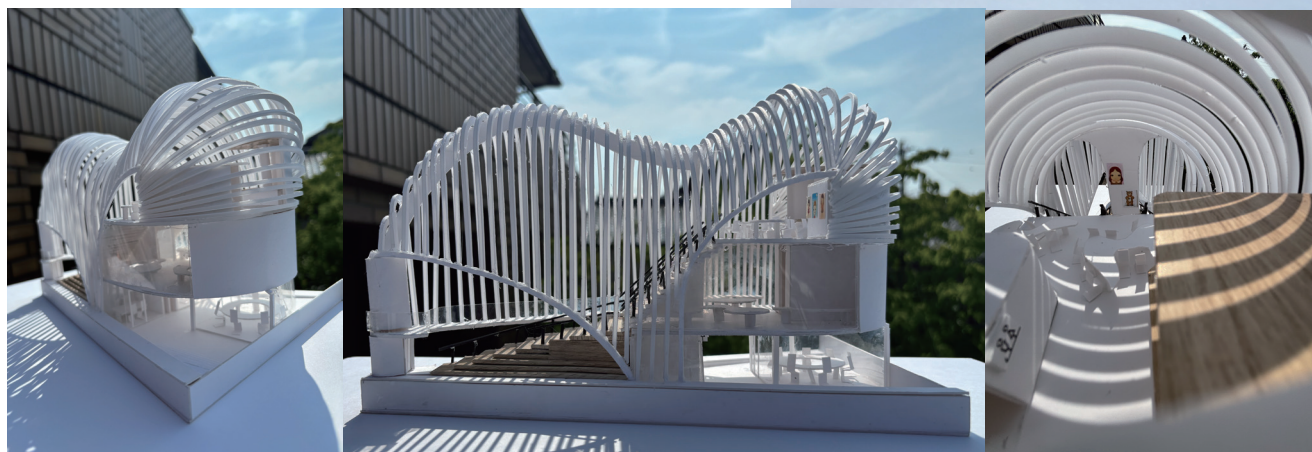
本計画は、三角形断面が連続する架構によって、屋根と壁を一体的に構成する形態を特徴とする。反復する三角形のボリュームは、外と内で異なる性格の空間を生み出し、用途と居心地に多様性を与えている。内では、屋根裏状の空間を形成することによって包まれるような安心感を生み、会議室や制作室など集中を要する場として位置づけた。一方、外である共用部は外部へと開き、交流を促す広がりのある空間として計画している。



## AIMAI MOKO

水野愛芽梨

本建築は「境界の曖昧化」を軸に、学生と地域が自然に交わる「ひらかれた場」を目指しました。敷地の高低差を活かした動線や、滞留を生む大階段、光が透過する曲線的な外装により、内と外、人と人の境界をゆるやかに繋いでいます。視覚的な透明性と心理的な開放性が重なることで、内部の活気が街へと滲み出し、多様な活動や偶然の出会いを誘発する、街に対して柔らかく開かれた建築を意図しています。



## 自邸

担当教員

佐藤布武・後藤周平・桑原雅明・西口賢・向井一規・吉村真基

### 到達目標

”将来の自分の家”について、考え、提案してください。

- 「1. 敷地」についてよく検討し、
- 「2. 建築家として自邸」を、
- 「3. 発表」してください。

#### 1. 敷地

敷地のポテンシャルを最大限に引き出す建築のを考えてください。

#### 2. 建築家としての自邸

これからの「家」とはどうあるべきなのか、想像してください。

#### 3. 発表

建築作品を通して、未来に向けたメッセージを。

一つの建築作品から、新しい時代の考え方や快適性など何らかの提言をし、多くの人の心に響かせるにはどうしたらいいのか。その可能性を育ててください。

皆さんは、新しい空間の発明家です。自分が作り出した空間の素晴らしさを冗長に語り、そんな新しい空間の作り方が、社会に派生していく。その結果、未来が今よりも楽しくなっていく。そんな作品を作ってください。

### 敷地

住所 | 愛知県名古屋市守山区小幡北 北山公園

用途地域 | 第1種低層住居専用地域

敷地面積 | 約 196m<sup>2</sup>

建蔽 | 40%

容積 | 80%

### 配置機能

- ・建物規模 延床面積 :150m<sup>2</sup> 以上 階数 : 自由
- ・構造 構造形式を十分に検討すること。

## ■ 視線がつなぐ空間

河村 花海

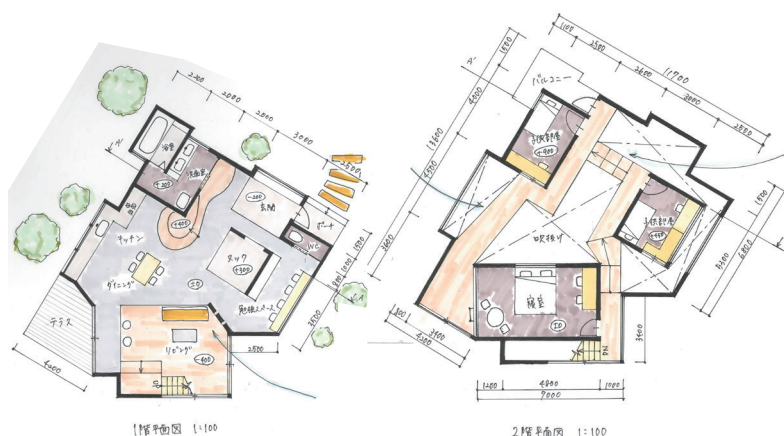
この計画は、視線を介して人と人、内と外、建築と自然が緩やかにつながる「視線がつなぐ空間」をテーマとした住宅である。敷地の高低差を活かすことで、分棟構成でありながら視線の抜けによって空間の連続性を確保した。各開口部は一つの窓につき一つの景色という考えのもと、風景を切り取り、中庭や植栽を通して自然を身近に感じられる計画とし、日常的なコミュニケーションが自然に生まれる住まいを目指した。



## ■ つながりのかたち

高山 莉奈

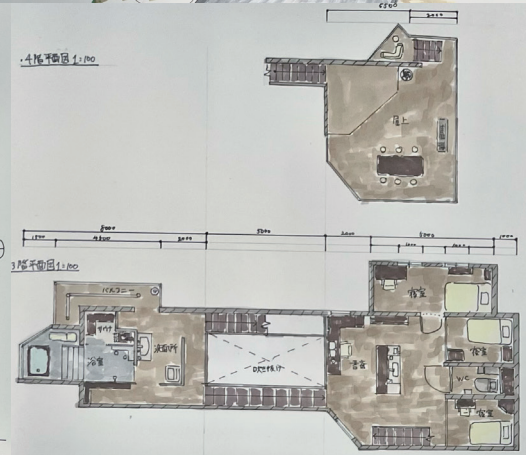
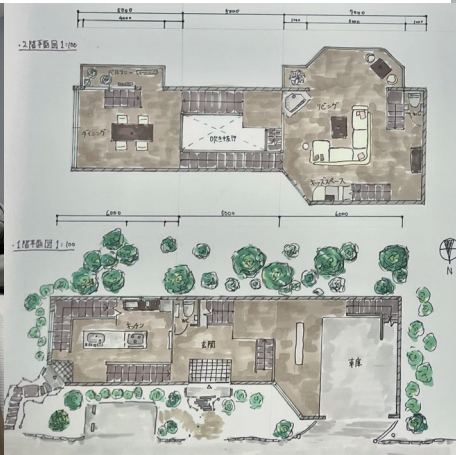
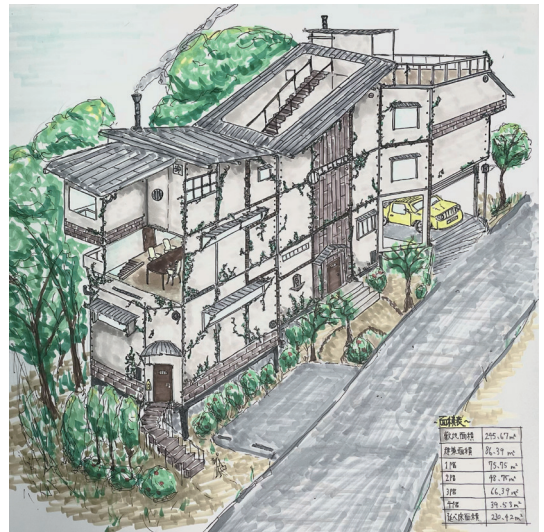
本住宅は、家の中に広がる声やまなざし、その重なりによって家族の関係がつくられていく住まいを目指した。壁で空間を区切るのではなく、床レベルの差や吹き抜け、渡り廊下といった高さの操作によって、家族の距離をゆるやかにつないでいる。2階の個室を持ち上げることで、その下に居場所が生まれ、渡り廊下は上下階をつなぐと同時に、1階の空間を分節する。異なる高さの居場所が重なり合い、互いの気配を感じられる住宅である。



## ■ 小さな家の大きな秘密

長嶋 志音

今回の計画では、あえて狭く使われていない駐車場を敷地に選んだ。坂道から見えた美しい街の景色と、小さな土地でどこまで設計できるかという好奇心が理由である。建物は道路より高い位置に配置し、北側は開口を抑え、樹木で囲うことで内部構成を「秘密」とした。その秘密は三つあり、中央の天窗付き吹抜けによる縦の広がり、2階東側の大開口と横方向の一体空間、そして南側の森へ飛び出す五つの空間である。狭小地の制約を逆手に取り、発見性と開放感をもつ住まいを目指した。

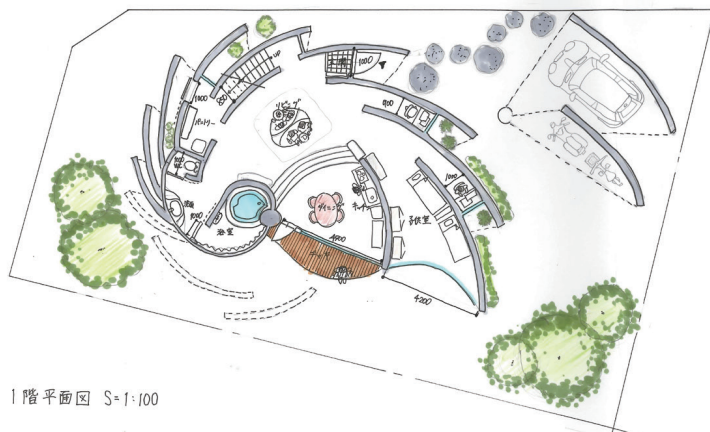


## ■ 包まれ 寄り添う

松本 千潤

「外部に対して閉じる」「内部につながりをもつ」

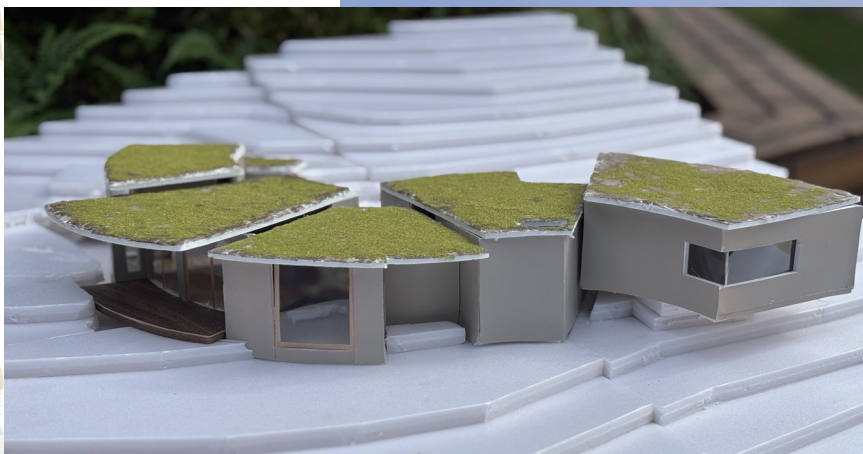
この2つを重視した住宅。外観は貝殻のような連続する曲面で構成し、人通りのある道路から人の視線を遮り、外の喧騒を和らげながら光や風といった自然を豊かに受け入れることで内側にひらかれた空間同士の一体化を高めている。完全に仕切らず、壁やレベル差、天井の高さの変化によってゆるやかに領域を分けている。個の時間を尊重しながらもたがいの気配を感じられる関係性を生むことで安心感とつながりをもつ住宅を目指した。



## ■ 移ろいの家

水野 愛芽梨

本住宅は、時間や季節の変化をありのまま受け入れる「移ろい」をテーマとした夫婦の住まいです。S字型の空間構成により、生活動線を滑らかにつなぐとともに、外部との接地面を増やして刻一刻と変化する光を室内に採り込みます。壁ではなく段差で空間を仕切り、傾斜地を活かした屋上庭園を設けることで、地形や自然と一体となる暮らしを実現。光・風・四季が住空間に溶け込み、豊かな時の流れを感じる建築です。



# 常滑現代陶芸美術館

担当教員

佐藤布武・後藤周平・桑原雅明・西口賢・向井一規・吉村真基

## 到達目標

常滑のまちに、新しく美術館を新築します。

近年、地方創生や多拠点居住、関係人口、といった言葉はすっかり一般化し、地方とのさまざまな関わり方が普及している。訪日外国人旅行者数に目を向けても、令和6年（2024年）の3687万人はCOVIT-19流行前の2019年の3188万人の水準を超え、歴代最高である。

観光のあり方自体も、時代とともに変化してきた。高度経済成長以降、都市住民に向けたサービスとして観光が展開され、1970年代になると日本では発地型観光と呼ばれる出発地点に集まって団体で旅行する観光が主流となる。1990年代に入ると、個人やグループで直接目的地に向かう着地型観光が発達し、個々人の好みに沿った観光が選択される。近年では、SNSの普及などで個々人の情報収集はより容易になり、観光地の良さを自分で発信することも可能になった。日本人はもちろん、訪日外国人の観光スタイルも変化しており、有名な観光地だけではなく、地域独特の良さをゆったり味わう観光形態も普及している。

今回、皆さんが提案するのは、そんな、その地域の魅力を伝える美術館である。

## 敷地

住所 | 愛知県常滑市栄町3丁目7-7

建築面積 | 約1400㎡

## 配置機能

一部二階建て以上（平家NG）で、以下の諸室を満たすこと。

延床面積：1000㎡程度。建築面積：500㎡～750㎡の間で収めること。

展示室 1 / 2 / 3 50㎡ / 50㎡ / 50㎡

企画展示室 20㎡

ロビー 100㎡

ラウンジ（分散配置可）※管理・運営用の事務室、受付などを含む150㎡

ロッカールーム 20㎡

研究・集会室 40㎡

トイレ（分散配置可）適宜

収蔵庫 1・2 30㎡ / 30㎡

前室 ※収蔵庫に隣接のこと 30㎡

機械室 50㎡ / 事務室 20㎡ / 倉庫（分散配置可）50㎡

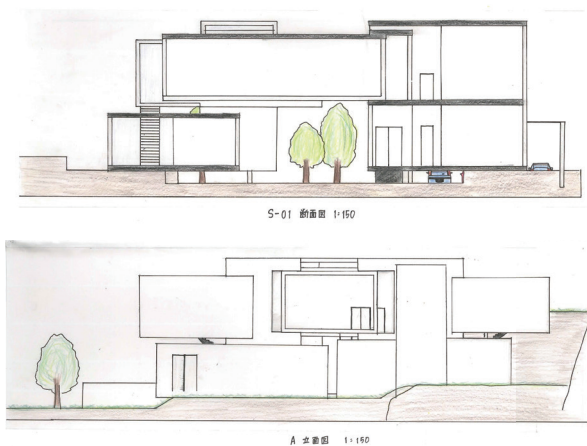
管理用駐車場 裏動線に4台分設置

諸室合計 690㎡

## ■ 隙間に滲む光

阿部 花暢

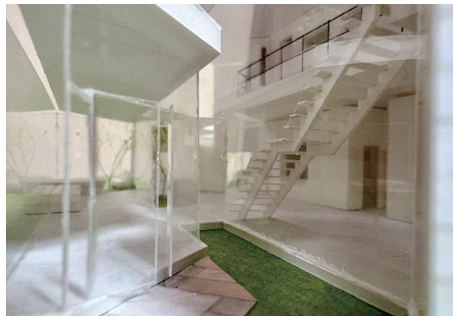
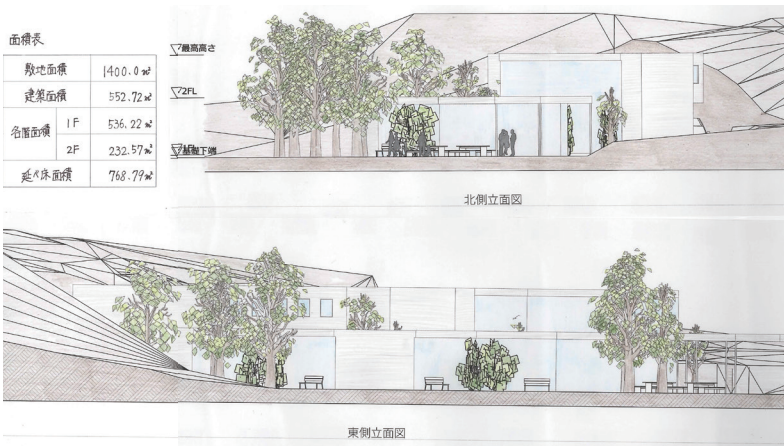
美術館は9棟の建物によって構成され、それらを密に集合させるのではなく、意図的に隙間をつくりながら組み合わせることで、光や風、人々の居場所を生み出している。隙間から取り込まれる自然光は、展示空間に柔らかな明るさをもたらしている。展示空間の間には比較的明るい屋外空間があり、訪れた人々は光の変化を感じながら内外を移動する。その結果、光に導かれるように自然と美術館の動線を辿る体験が生まれる。



## ■ 折れ曲がりが生む居場所

河村 花海

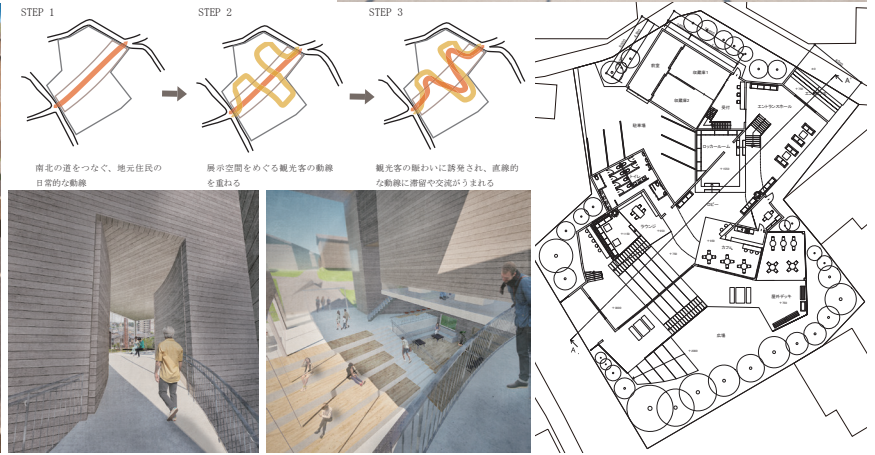
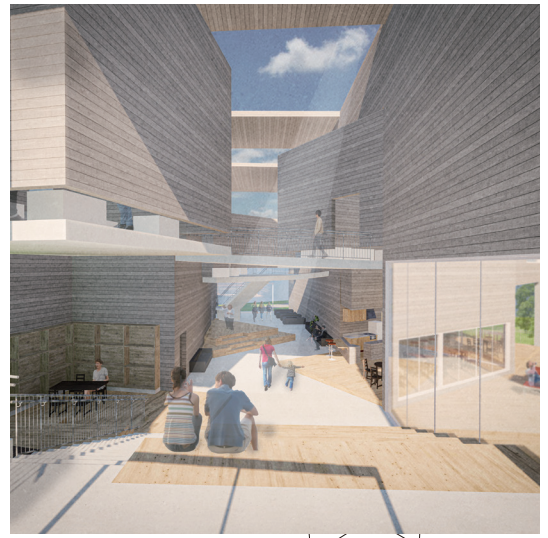
この計画は、愛知県常滑市のやきもの散歩道に隣接する美術館として、地域の風景や歩行体験と緩やかにつながる建築を目指した。建物外形を大きく雁行させたり、屋根下空間を内部から外部へ連続させたりすることで、外部に人が滞留できる居場所を生み出している。中央に貫く中庭は南北へ抜け、光と視線に奥行きを与える空間とした。東面の大きなガラス開口により、内外の境界が曖昧になる空間体験を創出した。



## ■ 誇りの通り道

佐藤 碧巴

本提案は、まちの延長にある日常の道としての機能を持つ美術館である。敷地の高低差を活かし、地元の生活動線として南北の道を繋ぐ長いロビーを通した。そこに展示室のヴォリュームを大きく突き出すように配置した。この干渉により、多様な領域が生まれると共に、頭上の展示空間の存在や、観光客の楽しむ雰囲気を感じられる。日常の中で空間を共有することが、産業への誇りを実感するきっかけとなることを目指した。



## ■ 「探索」～ある場所を目指して～

長嶋 志音

本計画のコンセプトは「探索」であり、常滑の焼物散歩道のように歩くこと自体が楽しい美術館を目指した。入口は2階に表裏二か所設け、裏は細道に突如現れる配置とし、表はトンネル越しに広場を見せつつ岩山上に導く構成とした。ロビーには企画展示や会議室を配置し、部分利用にも対応する。館内では窓や構造により中央広場を意識させ、行き方を探す体験を生み出した。丘を利用した登り窯を想起させる階段で3階へ上がり、展望を楽しんだ後、中庭へ降りる動線とした。裏動線や搬入口、バリアフリーにも配慮している。



## ■ にじむ光

松本 千潤

「和室空間」「光の入り方」

空間をあえて制限することで、かえって豊かな風情や精神性が生まれる茶室・和室空間の趣を光でも表現した。直接日光を感じさせるのではなく、水庭や地形、天井面を介して反射された間接光を取り入れることで、やわらかくにじむひかりを生み出している。水面の和室の気をのばし、天井を低くすることで水面から反射された光がおだやかに入り込む。



## ■ 旅の輪郭

水野愛芽梨

常滑の路地特有の「歩行に伴う視界やスケールの連続的な変化」を再構成した美術館の提案です。街の延長として一本の動線を敷地内へ引き込み、移動の過程そのものを空間化しました。各諸室はこの動線に従い付加的に配置され、歩く軌跡がそのまま建築の輪郭を形成します。管理機能を地中に隠し、誰もが通過できる構成とすることで、日常の移動の中でアートと偶然出会う、街と緩やかにつながる建築を目指しました。



# 小学校

担当教員

高井宏之・生田京子・谷田真・佐藤布武

## 到達目標

どのような子どもを育てたいのか。

本計画では、これからの小学校のあり方について考えることを期待する。

郊外住宅地の小学校の計画である。地域と積極的に関わり、地域の中で存在感があり、共に生きる喜びを分かち合える提案を想定する。

また、隣接する川や歩道との関連性についても考慮する。主に小学生を対象としている。成長期である子どもたちの発達段階の違いを認識し、五感に響く空間を考えて欲しい。学年が異なることで体格・身体能力・心理面での差は大きいことを認識し、学年を超えた多様な活動を誘発する空間についても考えて欲しい。

## 敷地

住所 | 名古屋市天白区大坪 2 丁目 160 1 番地

法規則 | 第一種中高層住居専用地域

延床面積 | 約 8,000 m<sup>2</sup>

敷地面積 | 12,632 m<sup>2</sup>(小学校部分) 公園部分 (5,291.9 m<sup>2</sup> と一体に考えても良いが、公園としての実利用面積は確保)

## 配置機能

主要用途 | 小学校 (地域集会室、小公園を積極的に複合する)

生徒数 | 380 人、14 クラス (1~2 年 各 3 クラス・各 30 名、3~6 年 各 2 クラス・各 40 名)

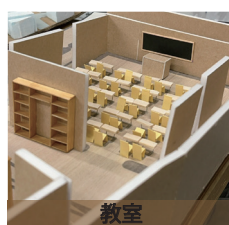
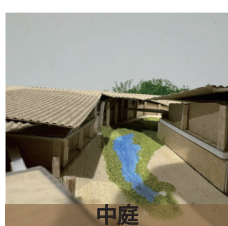
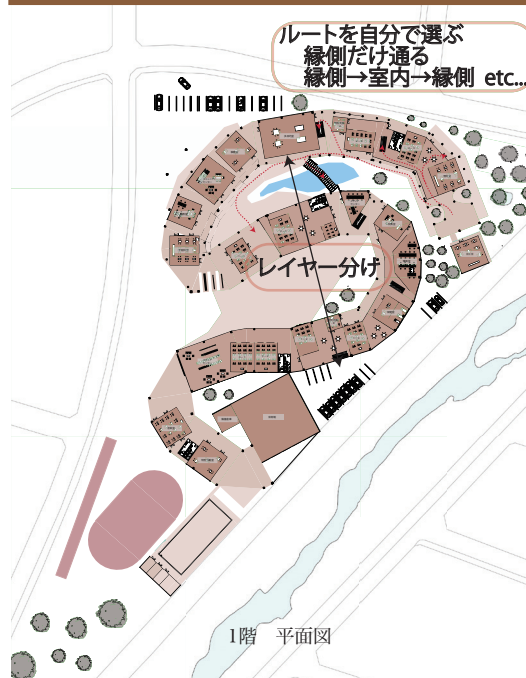
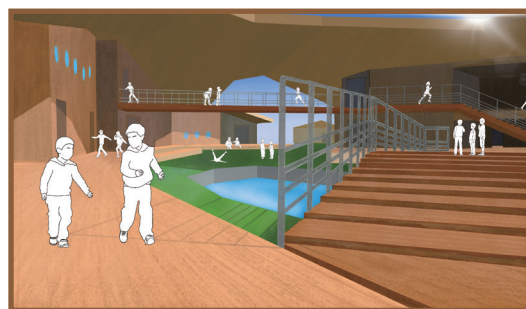
教室 | 普通教室、特別支援教室、家庭科室、音楽室、メディアセンター、体育館等

## ■ ゆらぎの小径

石塚颯真・岩村望生・岩村蘭丸

コンセプトを「冒険」とし、教室にとどまらず、子どもが思わず外へ出て動き回りたくなる学校を計画した。

敷地を森・地域交流・運動の三つのエリアに分け、それらを一本の道と連続した屋根でつなぐことで、回遊性と交流、レイヤー分けされた空間を生み出している。登る・くぐる・渡るといった動作を誘発する空間構成により、子どもが主体的に敷地全体を使いこなし、自然に人や地域と関われる学校を目指した。



## ■ Nobi Nobi ~つながりとひらいた居場所~

伊藤諒哉・市川紗弥・岡村咲奈

つながりとひらいた居場所をテーマに、学び、遊び、そして交流を通してのびのび成長できる小学校を提案します。

屋上はウッドデッキとし特別教室を配置しました。自然に触れ合う環境の中で、より創造的な学びが展開されることを期待します。

校舎は運動場を囲むように配置し、運動場を中心とした開放的な学びの空間を形成します。これにより、子どもたちが日常的に運動場に意識を向け、のびのびと活動できる構成としました。



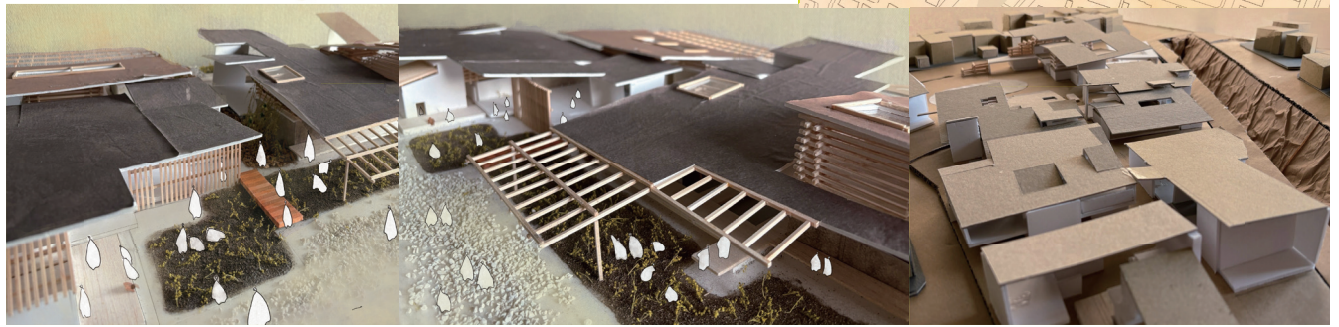
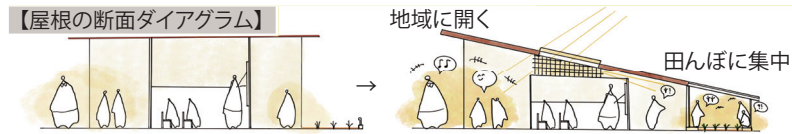
## ■ あしたの骨

安達晴捺・大山羽衣・小泉史昇

現代の小学校は知識の一方的なインプットに偏りがちである。そこで本計画では、学びが教室内に留まらず、田んぼを含む地域環境と緩やかに接続する教育基盤を提案する。地域との接続軸に沿って開く平面構成と、子どもと地域のスケールに応じた屋根勾配により、学びは発達段階に応じたアウトプットへと変換される。子どもは、他の年代を交えた思考・制作・対話を重ね、自らの骨を形成していく。



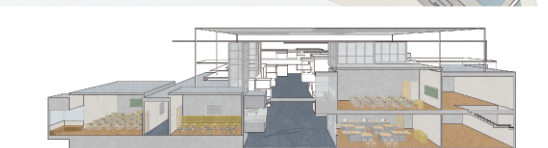
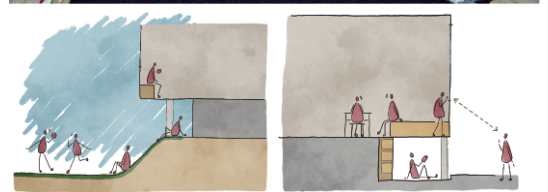
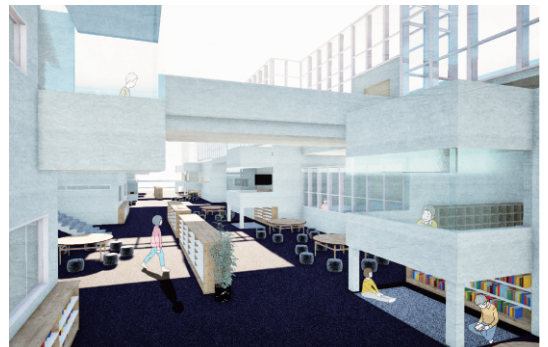
【二軸】から生まれる構成



## ■ 学びの余白

松本尚子・矢内日南乃・分部みゆ

「にじみ出る学びの場」をコンセプトに、教室と周囲空間を緩やかにつなぎ、学びが自然に広がる小学校を提案した。教室を前後にずらして配置し、その間に床を下げたオープンスペースや出窓を設けることで、安心できる居場所と見守りやすさを両立している。高学年と低学年の棟の間にメディアセンターを通すことで、異学年交流や地域とのつながりを生み出し、学び・遊び・交流がにじみ合う創造的な学校を目指した。



## 滞在・交流拠点

担当教員

高井宏之・生田京子・谷田真・佐藤布武

### 到達目標

本計画では、「体験・滞在」をテーマとした余暇活動施設の設計を行う。

「焼物のまち」として長い歴史と文化を持つ愛知県常滑市を課題地とし、住民と来訪者との関係性を考える課題である。

課題地は、愛知県常滑市栄町のやきもの散歩道を対象とする。今回の課題に取り組むにあたり、敷地選定を各自で行う。

分散配置も可能だが、全体として一つの施設として機能するための方策も計画して欲しい。

既存建物を建て替えたり、改修・転用しても可。市ではやきもの散歩道地区景観計画が策定されている。まちなみに配慮しつつ、地域の文化的資源が十分活かされ、まちや地域が活性化するような計画を望む。

### 敷地

所在地 | 愛知県常滑市栄町

やきもの散歩道 A コース 周辺街区 (約 12ha)

第一種住居地域

建蔽率 60% 容積率 200%

準工業地域

建蔽率 60% 容積率 200

### 配置機能

#### ①制作体験施設

- ・土の工房 150 m<sup>2</sup> 程度 (手びねり、電動ロクロを使った陶芸作品が制作可能)
- ・自由工房 150 m<sup>2</sup> 程度・その他 100 m<sup>2</sup> 程度 (ギャラリー、倉庫等)

#### ②宿泊研修施設

- ・7室、定員 40人: 和室 (4人用 2室、8人用 3室)、洋室 (4人用 2室)・浴場あり
- ・ホール 150 m<sup>2</sup> 程度
- ・研修室 20人用 20m<sup>2</sup> 程度 (仕切り可能)

#### ③展示施設

- ・ギャラリー 150 m<sup>2</sup> 程度
- ・レストラン
- ・カフェ 100 m<sup>2</sup> 程

## ■ まねきのかたち

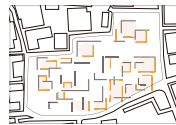
青木 椋太郎

現在の常滑は散歩道にある土管坂のような「めぐりあるく観光」になっていて、立ち止まりたくなるような場所が少なく焼き物の製作や絵付けなどの体験の場が限定的である。そこで既存の休憩所を解体し、滞在性・体験性を加えて「歩いて楽しい立ち止まって心地よい」空間に再設計していく。休憩所をただ建て替えるのではなく機能として残しどこにいても体を預けれる、どこを歩いても立ち止まれる、敷地全体が休憩所へ。



### 【奥行の予感】

散歩道からの「よりみち」を作り奥行きを設けることで人を呼びきつかけへ



### 【プライバシーの確保】

トイレ・客室・風呂・厨房等は木壁を用いて最低限の私的空間を作る



### 【屋根によるエリア分け】

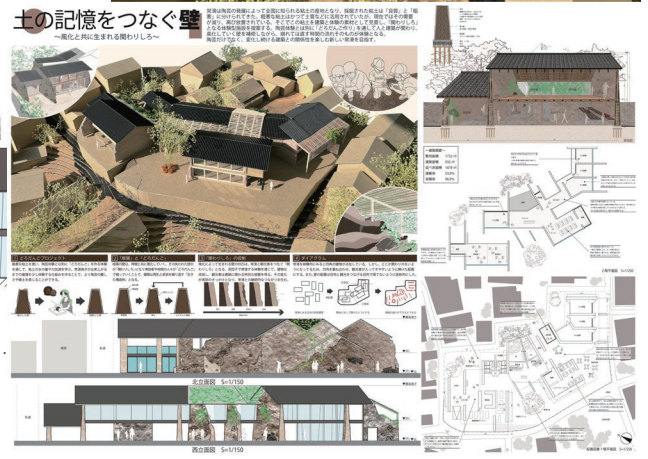
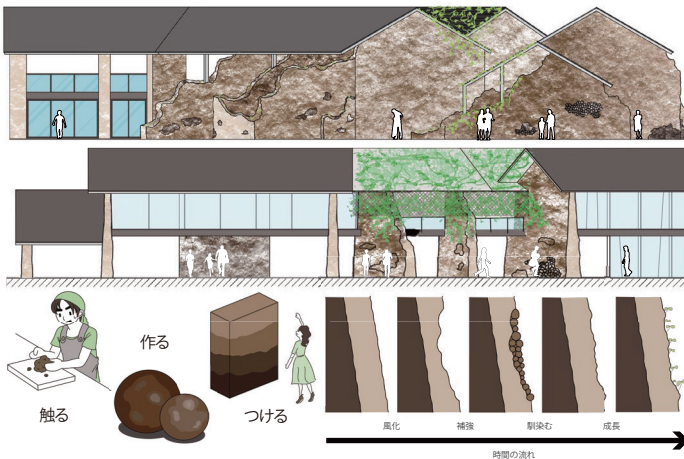
敷地全体が休憩所になるよう壁・床で区切らず屋根によって空間を分ける

## ■ 土の記憶をつなぐ壁

～ 風化と共に生まれる関わりしろ～

長谷川 代羽

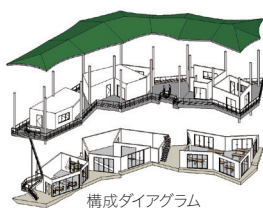
粘土は「良質」と「粗悪」に分けられてきた。粗悪な粘土は土管などに活用されていたが、現在ではその需要が減り、放置されている。そこでこの粘土を建築と体験の素材として見直し、「関わりしろ」となる体験型施設を提案する。「どろだんご作り」を通して人と建築が関わり、風化していく壁を補修しながら、崩れては直す時間の流れそのものが体験となる。陶芸だけでなく、変化し続ける建築との関係性を楽しむ新しい常滑を目指す。



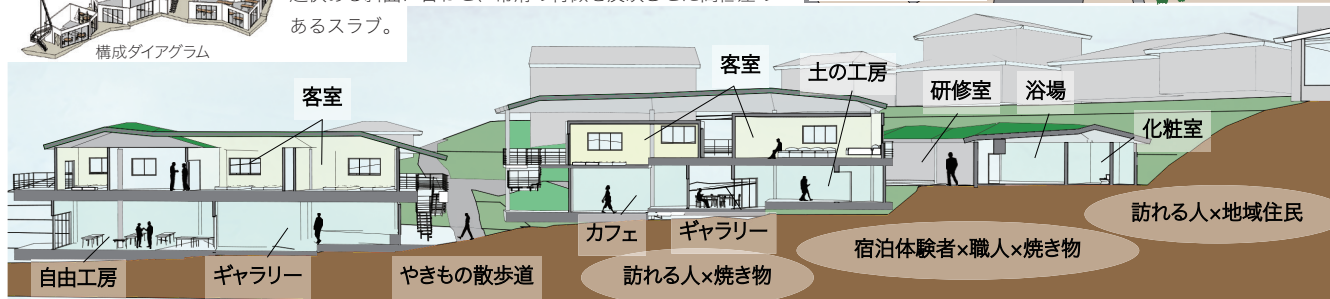
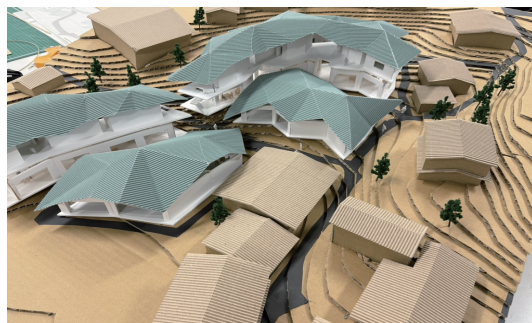
## 継承する散歩道

本田陸

歴史あるやきもの散歩道の景観維持と産業振興を目指す提案をする。通り過ぎてしまう急斜面の敷地に、散歩道の「抜け道」となる新たな街道を創出した。地形に沿った連なるボリュームと高低差を活かしたスラブ構成により、伝統的な街並みに呼応するダイナミックな表情を形成する。工房・カフェ・展示を軸とする「つくる・つかう・つたえる」のプログラムが職人と来訪者の交流を生み、常滑の未来を繋ぐ新たな原風景となる。



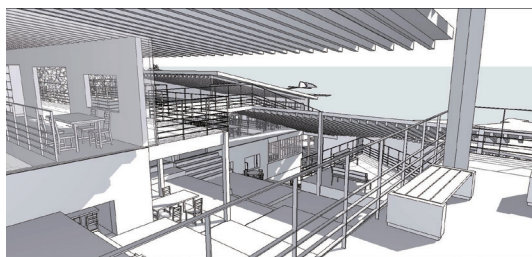
細く続く街道に立ち並ぶボリュームをひとつながりに連続する折り屋根。  
 周囲の民家が立ち並ぶ様子を表現しつつも、近くで見るとダイナミックな常滑の新たなファサードとなる。  
 起伏ある斜面に合わせ、常滑の特徴を反映させた高低差のあるスラブ。



## 寄り道

見越星哉

常滑散歩道では、焼き物が屋外に置かれ、カフェや工房、縁側などの休憩所が点在し、くつろぎながら歩く体験が連続している。本計画では、休憩・展示用のデッキと新たな道を設け、散歩道からデッキ、施設へと連続する空間構成とした。切妻屋根を配し周辺と調和させつつ、一つのボリューム感を保つことで、常滑の風景に馴染みすぎない建築を目指した。



# エリアリノベーション

担当教員

谷田真・生田京子・久保久志・玉井洋一

## 到達目標

・名古屋駅周辺では、現在、リニア開業後のまちを見据えた構想を基に整備が進められています。中でも駅西エリアは、駅西銀座商店街を軸に今でも下町情緒を残す、不思議な感覚がするエリアですが、今後は大きく風景が変わることも予想されます。

・本課題では、そんな駅西エリアを課題地とし、40人程度の人たちを一つの生活単位として考え、彼らとともにどのような住み方ができるのか、どのような相互扶助システムをつくることができるのか、といった観点で持続可能なコミュニティに資する建築を設計して下さい。

## 敷地

- ・所在地：名古屋駅西エリア（駅西銀座商店街周辺）\_別紙参照
- ・おおよそ 30ha（比較：常滑やきもの散歩道 A コース周辺街区\_約 12ha）
- ・商業地域（建蔽率 80%、容積率 400、500、700、1000）

## リサーチ

- ・課題を念頭に、計画地のフィールドワークを進め、その状況を分析することにより提案につなげて下さい。
- ・特に、エリア内に現在いる人々と、どんな関わりを持って住むことが可能なのか、「住む機能」+ $\alpha$ を考え、提案して下さい

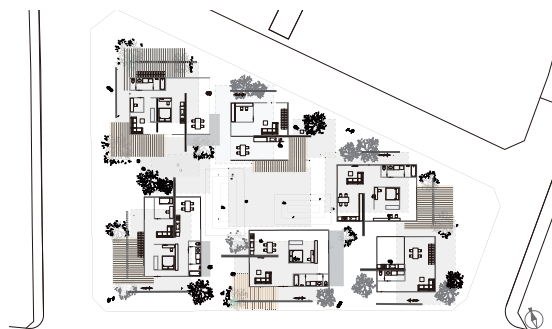
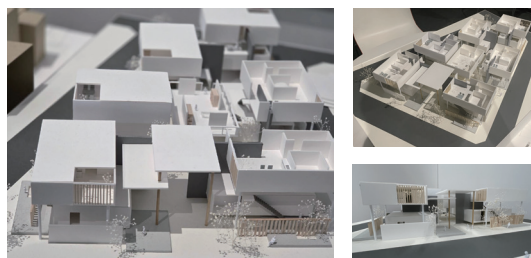
## 配置機能

- ・駐車場といった空地、既存建物の転用、複数敷地への分散配置、路地・広場を含む公共空間への提案でも可。

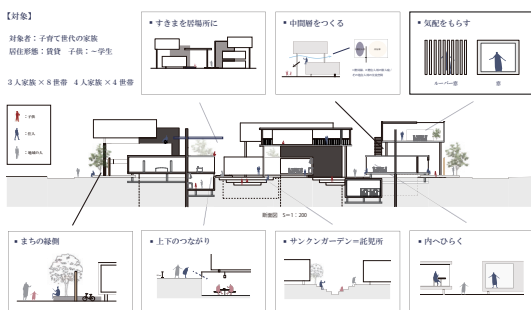
## 見守りハウス～子供の気配が見える家～

青木 椋太郎

少子高齢化が進んでいる現在の駅西エリアでは公園や安全な遊び場が少ないため子供が「まちで遊ぶこと」がむずかしく、地域コミュニティが希薄化して子供を「見守る目」が減っている。そこで子供が安心して遊べ、学べる居場所となるような集合住宅を提案する。視界の抜け、空間のずれを意識することで見守りを生むだけでなく子供の居場所も作り出した。



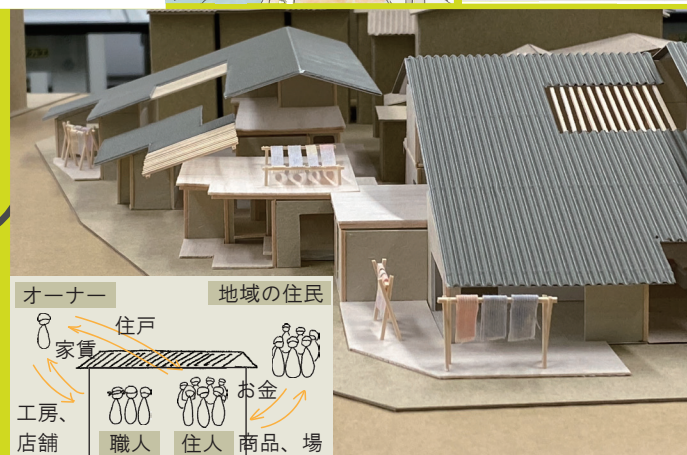
1階平面図



## てしごとベース

坂井 奈月

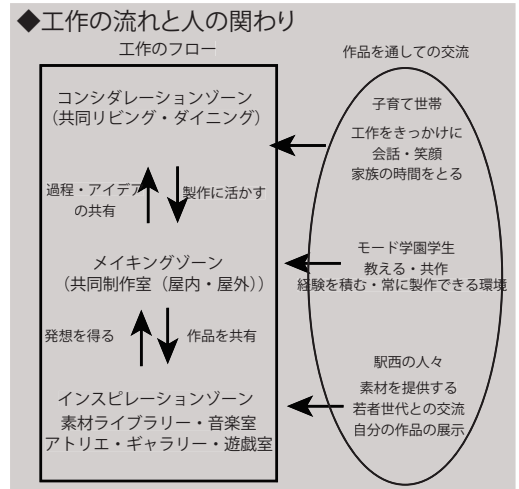
かつては手仕事の文化で栄えていた駅西地区も、現在では店を閉じてしまう人が後を絶たない。そこで、職人の受け皿となって彼らを応援する、工房・店舗と住宅が一体となった文化的拠点提案する。もう一度職人の文化をこの地によみがえらせ、移り行く時代の中でもいつまでも変わらない賑わいをこの地域に残し続ける。住居と工房をつなぐ土間空間と、建築内部に取り込んだ周辺住民の動線により、異なるコミュニティの人々が変わる。



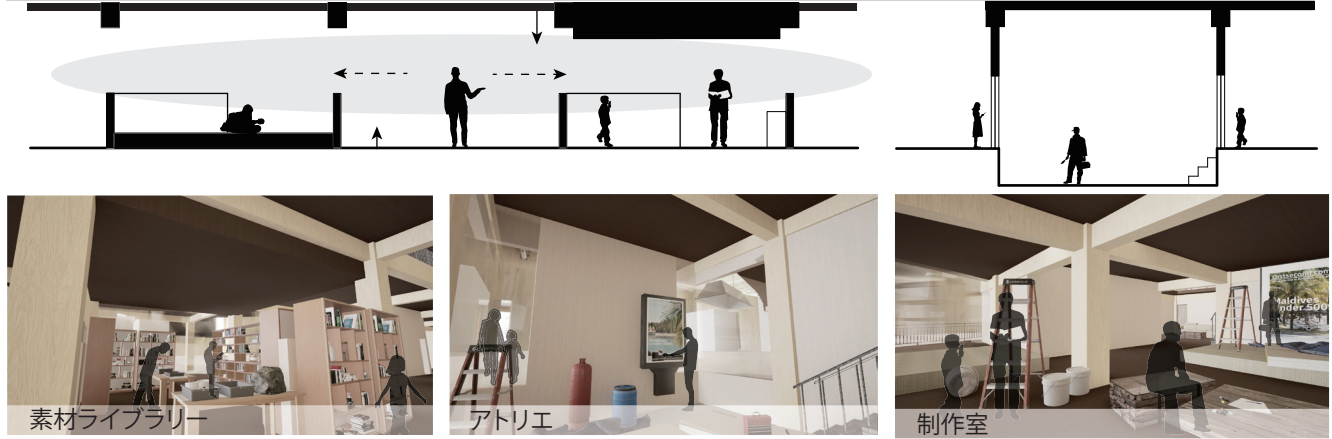
# 創造 ～作品・人とのつながり・駅西を～

那須田知樹

つくりかけの都市だからこそ個性があふれる駅西。そこに潜む個性を「つくること」によって引き出すことでより活発な街になると考えた。そこで、工作に特化した児童館を併設した集合住宅を提案する。この建築では、工作や美術という「共に手を動かす行為」を通じて、親子が会話し、笑い合う時間を取り戻す。それは単に創作活動の場ではなく、つくることを通して、家族や地域、人と人の関係をもう一度編み直すための場所である。



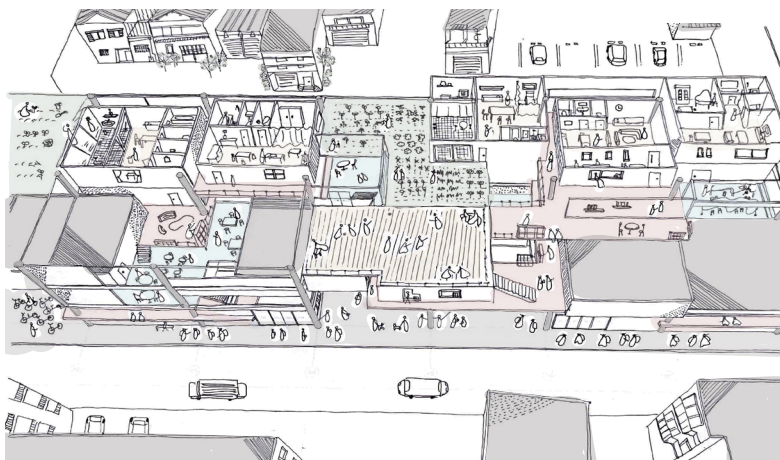
## ◆ダイアグラム



# あそびあいハウス

横山葵

放課後を延長するように子どもたちの居場所をまちの中につくる建築である。通学路に面した敷地に、遊び・学び・興味が重なり合う空間を重層させ、大人と子どもが常に見守り合う関係を生む。柱とずれた壁による隙間は視線と気配をつなぎ、成長に応じて関わり方が変化する。ここが、子どもが大きくなっても「帰ってこられる場所」となることを目指す。



# 都心複合施設

担当教員

谷田真・生田京子・久保久志・玉井洋一

## 到達目標

本計画では、まちの顔となる都心複合施設を提案する。平日のオフィスへ勤務する人々への姿、土日の商業施設利用者への姿など、時間軸に着目して考えた。人・情報・モノの集まる場・発信の場づくりを目指す。敷地は都市市街地の骨格を形成し、市民の憩いの場でもある久屋大通公園に面した街区である。まちなかに更なる賑わいを創出し、中心市街地の活性化の一助になることを望む。

## 敷地

住所 | 名古屋市東区（一部中区）敷地面積 | 5,000 m<sup>2</sup> 程度 既存敷地は無く、更地であるものとして計画する。地下街等との接続にも留意する。

関連法規 | 商業地域、防火地域、駐車場整備地区

建蔽率 80% 容積率 800

## 配置機能

①図書館部門（約 3,000m<sup>2</sup>）

- ・開架閲覧機能（約 1,800m<sup>2</sup>）
- ・児童図書閲覧機能（約 700m<sup>2</sup>）
- ・学習機能（約 500m<sup>2</sup>）

②生涯学習部門（約 2,500m<sup>2</sup>）

- ・ワークショップ機能 大部屋（約 500 m<sup>2</sup>）、小部屋（約 600m<sup>2</sup>）
- ・オープン活動機能（約 600m<sup>2</sup>）
- ・創作活動機能（約 800m<sup>2</sup>）

③子育て支援部門（約 500m<sup>2</sup>）

- ・キッズパーク機能（約 400m<sup>2</sup>）
- ・一時保育・子育て支援機能（約 100 m<sup>2</sup>）

④賑わい創出部門（約 2,000m<sup>2</sup>）

- ・イベント / 集会機能（約 800m<sup>2</sup>）
- ・展示 / 交流機能（約 700m<sup>2</sup>）
- ・商業 / 支援機能（約 50 m<sup>2</sup>）

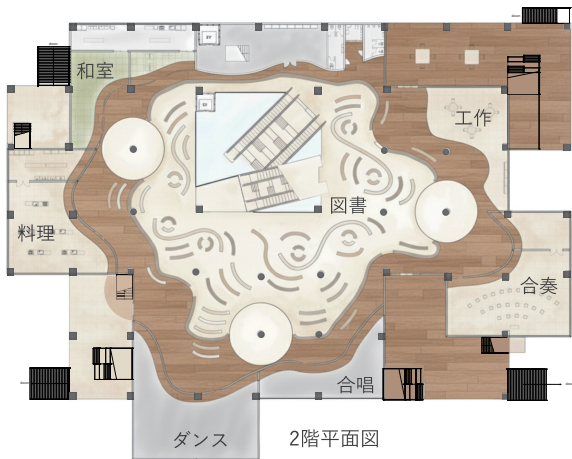
⑤共用部門（面積は適宜）

## ■ ひとつながり、深まるまちなか

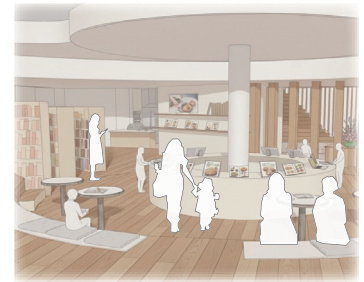
—生活と交流の豊かさを再考する—

安達晴捺・服部天音・藤山ゆき

住宅・商業・文化が隣り合うポテンシャルをもつ栄で歩き、立ち止まり、回遊する中で知識や関係が自然に深まり、生活が豊かになっていく施設を提案する。図書館と活動が隣り合い、調べる・活動する・発信するを繰り返す場とした。活動が街へ溢れ出すよう外観に凹凸を与え、分野を横断する配架計画によって新たな出会いと関心を生む。行為が重なり合い、学びと交流が育まれ、建築と人が栄の街をひとつながりにしていくことを目指す。



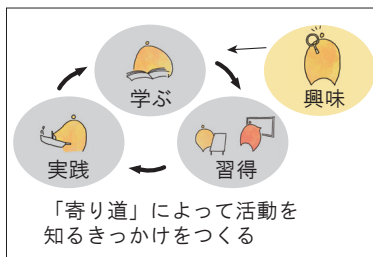
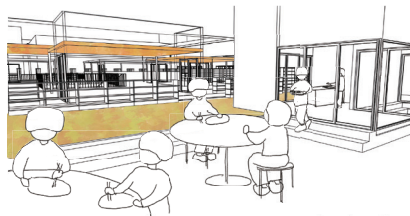
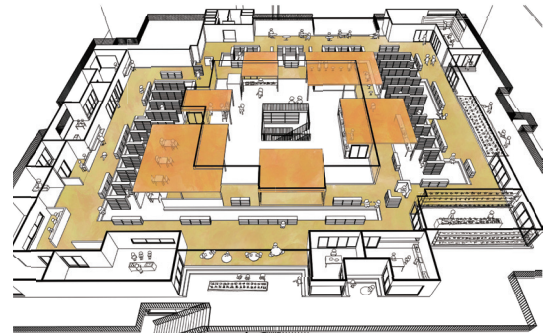
書架の種類



## ■ よりみちくさかえ

岩村望生・坂井奈月

効率が重視される現代において、人々の日常は家と目的地とをまっすぐ行き来するだけとなりつつある。そんな生活の動線の中に少しでも豊かな活動が見える場所があれば、私たちの人生はより充実するのではないだろうか。「寄り道」から自分の生きがいを見つけるきっかけをつくる、そんな一人ひとりの興味から始まる活動が多様な人々を集め、出会いの輪を広げる施設を提案する。



異なるジャンルの回遊動線に沿った活動・図書機能  
生涯学習・書架



## ■ そだちあい

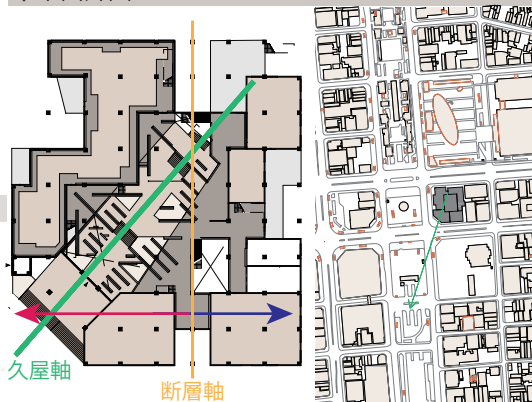
～図書館で生まれる新たな家族のかたち～

小泉史昇・那須田知樹・本田陸

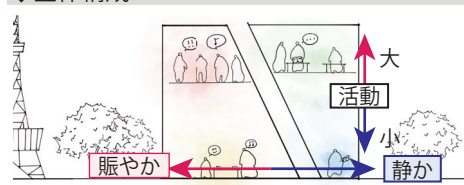
「そだちあい」で子育て支援を日常の延長へ。久屋大通の賑わいを取り込みながら、多世代が「育ち合う」場を提案する。斜めの断層軸が異なる環境を緩やかに繋ぎ、子の自立と親の成長を促す空間を構成した。親と子、利用者が本を通じて自然に繋がる姿を「新たな家族」と捉え、見守りと対話が生まれる書架動線を配置した。単なる施設ではなく、支援の枠を超えた多世代の成長を生み、その活気が久屋大通へと溢れ出していく。



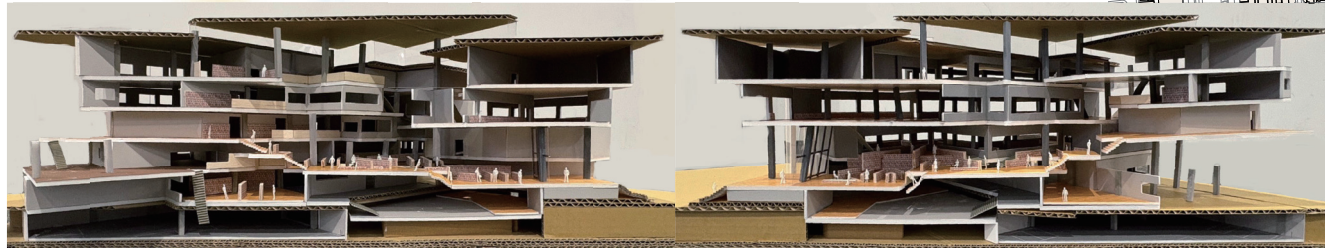
◆平面計画



◆全体構成



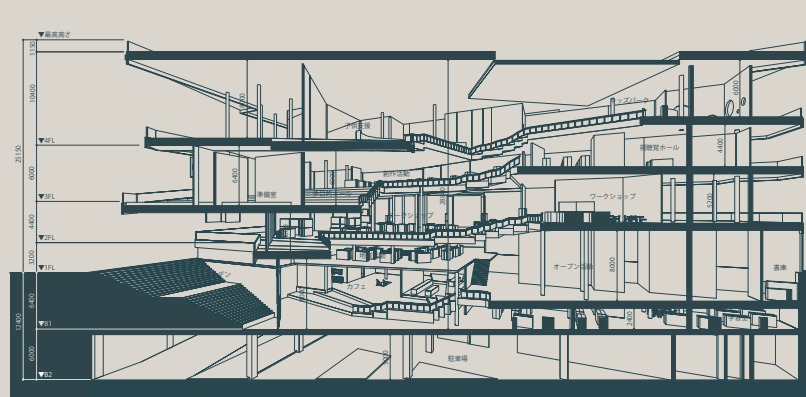
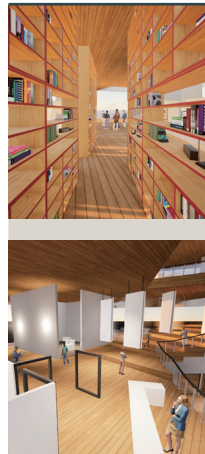
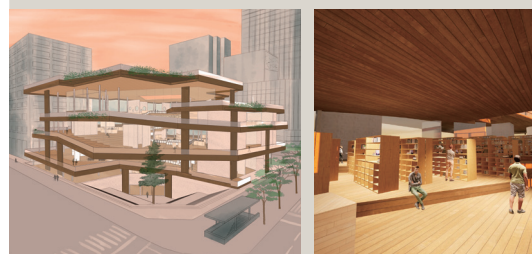
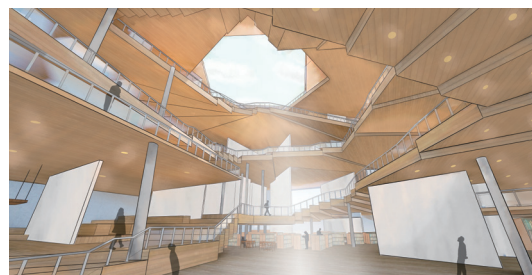
◆図書館型家族



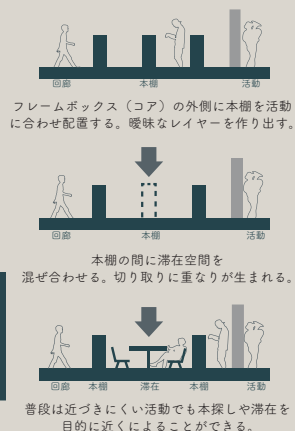
## ■ ぱっと見

倉橋輝成・長谷川代羽・松井優大

現代は学びや交流の場へ参加すること自体のハードルが高い。活動への参加は、「見る→知る→関わる」という段階的なプロセスを経て成立する。本提案では、活動が集積する栄という土地において、人々が通過や滞留を重ねる中で活動を段階的に認識できる状態をつくることで、無理なく参加へと導き、参加のハードルを下げることができる。これにより、人々がそれぞれの生涯学習をもち、その生活をより豊かなものにする。



断面図 1/1000





# 卒業制作

# ■ 日常を歪ませる影

～大久野島における癒しと命の消費を問う～

寺西知慧

大久野島は癒しの島である同時に、命が消費されてきた歴史を現在まで引きずる島である。

本提案は、うさぎの保護や観光行為を否定するものではなく、観光客自身が消費構造の内側にいることを自覚してしまう瞬間を建築としてつくる試みである。

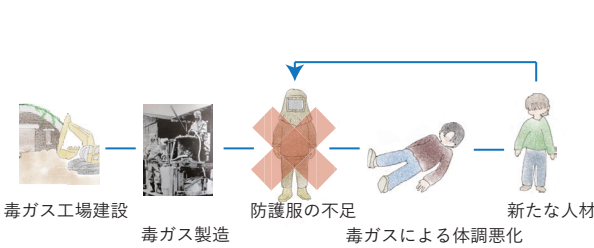
ここでは影は展示されない。

日常の一部として歩く中で身体的に経験され、同じ風景が別の意味を帯びて立ち現れる。

建築は自分の選択する行為が何を残すのかを問い返す場として島に介在する。

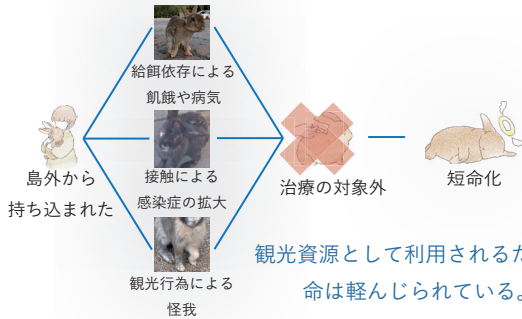
## 命の消費。

過去〈人〉

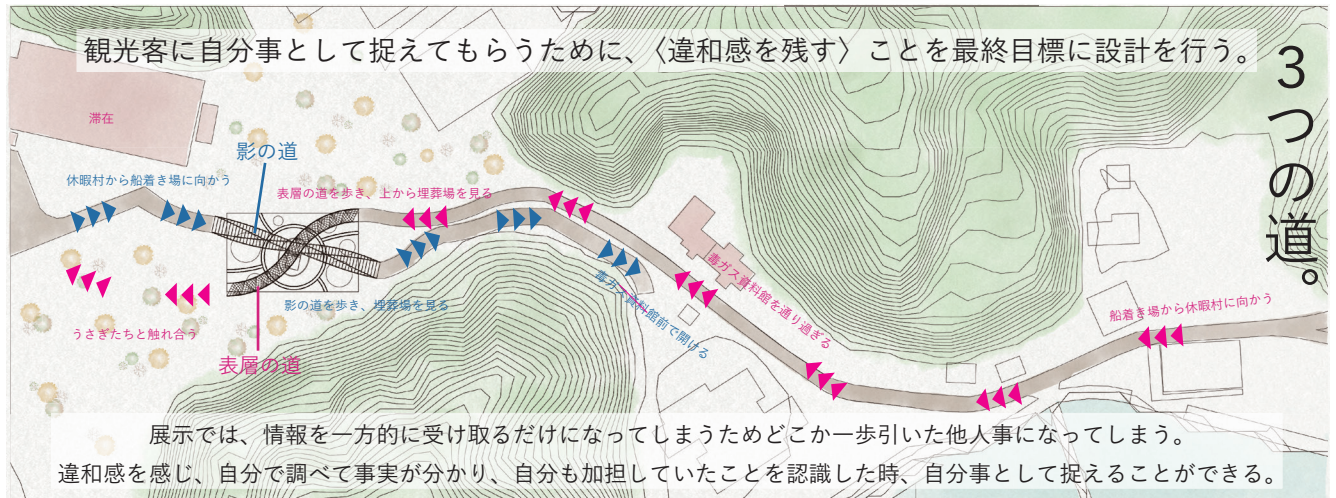


まるで使いまわしのよう人の命が扱われた。

現在〈うさぎ〉



観光資源として利用されるだけで命は軽んじられている。



観光客に自分事として捉えてもらうために、〈違和感を残す〉ことを最終目標に設計を行う。

展示では、情報を一方的に受け取るだけになってしまうためどこか歩引いた他人事になってしまう。違和感を感じ、自分で調べて事実が分かり、自分も加担していたことを認識した時、自分事として捉えることができる。

3つの道。

全体配置計画



静寂の間と埋葬場



影の道内部



地面を不連続に3m掘り下げ、埋葬場を設ける。地面を3m落とす操作によって、日常に溶け込みながらも象徴性をもつ埋葬場を成立させる。うさぎが1羽埋葬されるとその上に花が1輪植えられる。島を再び訪れると花が増えていることで短命化を知ることができる。

影をねじれによって表現する。足元は不安定になり、視線は遮られる。ねじれは観光客を隠れた影に引き込み、再び日常へと送り返す。ねじれから見た埋葬場は全体像は見えず、表層の道で花畑のようにみえていたものが縁取られた「落ち込み」として認識される。

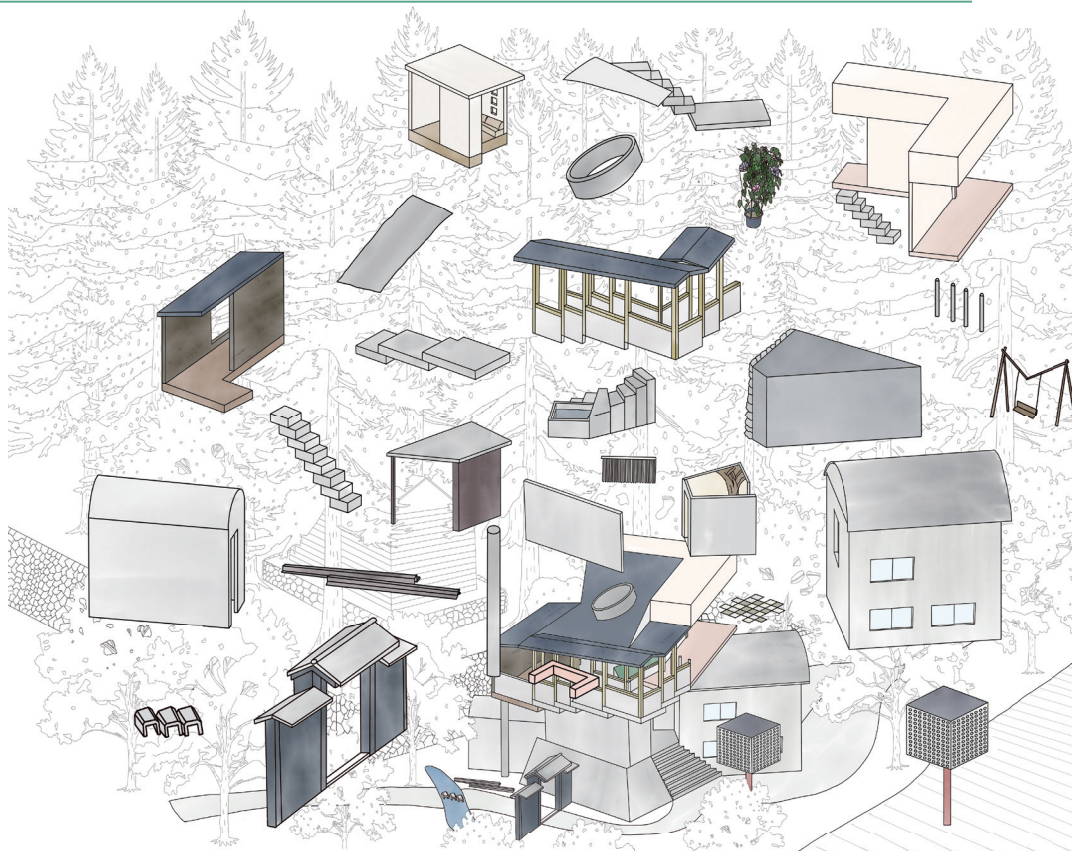


# 22年の人生史

～原体験が紡ぐ私の日常～

村林愛斗

日々悩みながら大学生として生活をしている私。人一倍悩んでしまうこの性格の原因を私は自分自身を理解できていないことにあると考えた。そして、私の過去の自分の体験（原体験）を振り返ることが今の自分を深く知ることにつながると考える。人の行動というものは経験則によって決定されるからこそ、過去の出来事や体験は今の私の日常になっている。私が小さい頃に入り浸っていた私だけの空間がある、18年間過ごした町の神社の裏を提案敷地とし、その場所に私の原体験の集積を行う。私自身の35個の原体験をドローイングし、それを五感の観点から抽出をし、空間に落としていく。この建築をめぐる、私の原体験と触れることで私は私自身と向き合うことができる。それがこの建築物がこの場所に建つ意味である。



原体験一覧

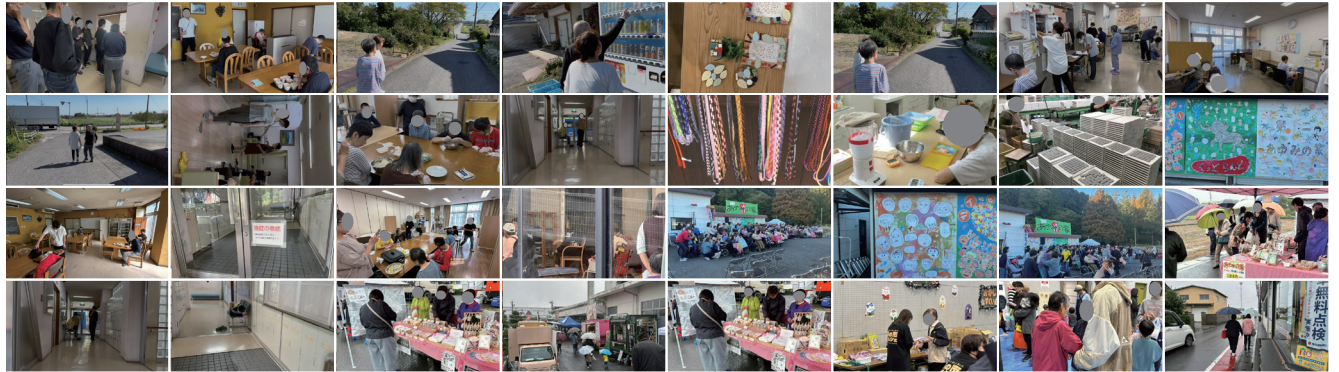
抽出要素一覧



# ■ あゆみ、あゆまれる散歩道

～障がい者施設と地域を縫い合わせる～

西脇嵩人



わたしたちは障がいと聞くと一歩足を引くかもしれない。それは彼らのことを知らないからだろう。同時に彼らもまた地域に慣れることが出来ない一面もあるからだろう。私はこの一年間地元の障がい者施設で実習体験やボランティア活動を行って調査をした。そんな体験中の気づきから本設計は始まる。彼らの日課活動である散歩に注目し、第一歩として三か所に仕掛けを、廃園幼稚園にもう一つの日課活動拠点を作る。



実体験での気づきから3つの設計ルールを作る。

## 1. そこにある人の声や花などの環境要素を取り入れる

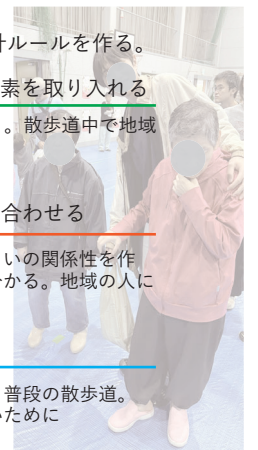
地域とのかかわりは環境とのかかわり。散歩道中で地域の環境に触れてもらうため

## 2. 施設利用者さんの散歩動線と各地点の地域の人の日常動線を隣り合わせる

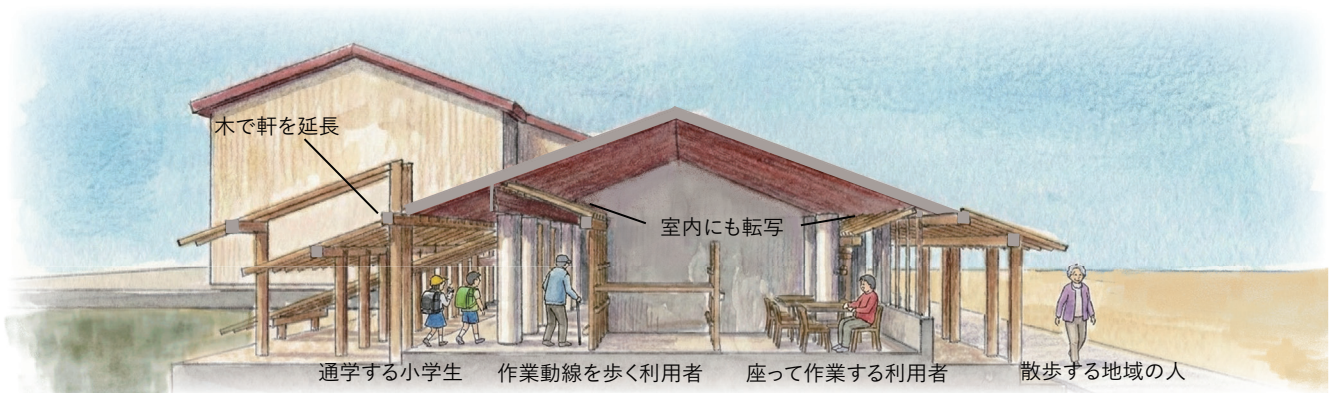
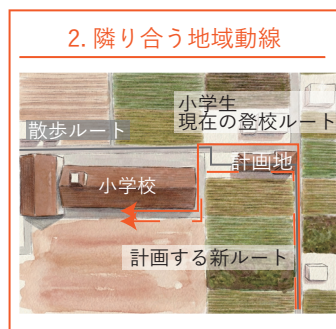
利用者さんと地域の人との隣り合うくらいの関係性を作る。隣にいても彼らのことは分かる。地域の人にとっての良いものとなるように。

## 3. 既存の要素から拡張して構築する

彼らはいつも通りを大切にしている。普段の散歩道。まちにとっても異質なものにならないために



### 1. 廃園幼稚園から活動拠点へ



名城大学建築学科大学院建築学専攻優秀論文・作品集

監修 | 佐藤布武、米澤貴紀

編集 | 池田裕太郎、城野雅貴、伴拓実

フォーマットデザイン | 奥村昭徳

発行 | 建築同窓会

発行日 | 2026年2月25日



# MA 2025

名城大学建築学科・大学院建築学専攻 優秀作品集  
Department of Architecture Meijo University YEARBOOK 2025

